

ティーンズハート大賞**三次通過**

『さよなら、大好きなひと』

原稿用紙換算250枚

小坂尚子 著

プロローグ

さよなら、

あたしの大好きなひと。

本当はずっと一緒にいたかったよ。

だけど、そんな些細なことさえ叶わない願いだった。

どうして？

そんなのあたしになんかわからない。

きつとあなたもわからなかったよね。

一緒に泣いたあの夜のこと、

あたしは一生忘れない

さよなら、

あたしの大好きなひと。

本当はその手をはなしたくなかったよ。

だけど、そんな些細なことさえ叶わない望みだった。

あたしは恋をした。

たしかにあなたに恋をした。

それはウソじゃない。

夢じゃないし、

幻でもない。

あたしはたしかに、恋をしたの

さよなら、

あたしの大好きなひと。

あなたがここにいた証を、

あたしは決して忘れないから。

あなたがあたしにくれた、たくさんの想いを、

あたしは決して忘れないから。

さよなら、

あたしの大好きなひと。

ありがとう……、

あたしの大好きだった、ひと

……。

1

「あれ？」

制服の衣替えがすんだばかりの秋の朝。

秋なんて言ってもまだなんとなく暑さが残る。

今年も暖冬だつて昨日のニユースで言つてたっけ……。

そんなどうでもいいことをボケ　　と考えながら、お父さんたちの寝室の前を通ると、

いつもはとっくに出かけてるはずのお父さんがワイシャツに袖を通してるのが見えた。

「お父さん、会社は？」

「胡桃、忘れちゃつたの？　今日おばあちゃんの命日だつて言つたじゃない」

喪服のお母さんがお父さんに黒いネクタイを渡しながら、あきれたように言つた。

「あー、お墓参りか」

「そつだよ。胡桃も一緒に行くか？」

「やーよ。あたしは学校があるし、今日は沙耶と買い物に行くんだもん」

おばあちゃんつて言つても、あたしが生まれる前に亡くなつたらしいから、もちろん顔

も知らないし、お墓参りなんてめんどくさくて一度も行つたことがない。

「買い物？　あんまり遅くなるなよ」

お父さんはいつもみたいにそう言いながら、マジマジとあたしの制服を見つめた。

「な、なによー」

またスカートが短いとか、ルーズソックスがだらしないとか言つんじゃないでしょう

ね！（ウザいなー！　もうっ）

「いや……。胡桃のその制服、昔どっかで見たとあるよ。うな気がするんだよな」

「はあ？」

「なに言ってるんの、お父さん。」

「こんなかわいい制服、昔にあるわけないじゃん。」

「赤のタータンチェックのプリーツスカートに白のVネックのベスト。」

「ちよつと英国チックな超キュートなうちの制服。」

「これが着たくて中学の時めちゃくちゃ勉強がんばったんだから！」

「あたしもう行くね。」

「お父さんの視線がウザかったし、またなんか注意されたらたまらないし、あたしは足早に玄関に向かった。」

「胡桃！ 本当にあんまり遅くなっちゃダメよ！」

「はあーい！ いつてきまあーす！」

「お母さんの声を背中で聞いて、あたしは玄関のドアを開けた。」

あたし、長瀬胡桃。（くるみ）

十七歳、高二。ひとりっこ。

身長157センチ、体重は45キロ。

栗色に染めた髪の毛に最近ふんわりパーマをかけたのが結構気に入ってる。

おしゃれとカラオケが大好きな元気なコ。

ポジティブなんだけど単純すぎる性格がたまにキズかな。

（損が多いし）

クラスではすぐ目立つほうじゃないけど、まあそれなりにたくさん友達もいる。

カレシは今はいないけど、メル友とかライブハウスで出会った男友達とかはいっぱいいい

て女子高にいる割に、出会いには困ってないほうかな。

そろそろ寒くなるし、カレシが欲しいなあ〜って考え中。

そんなフツの女子高生だよ。

「ねえ胡桃！ このコート超かわいくない？」

「あ、ホントだよ。いいカンジだよ。」

「放課後、お気に入りのショップで、冬の必需品をそろえにそろえに来たんだ。」

「あ、胡桃ちゃん、いらっしやーい。」

眠たげな声で仲良し店員のママさんが出てくる。

「ママさん、なんか疲れてない？」

「そーなの！ 昨日さー、思いっきり飲まされちゃってー、超ダルイ」

「大丈夫ですかあ？」

あたしと沙耶は笑いながら声をそろえた。

今日買ったのは、レザーのコート。

それからファアのバックとピアス一個。

夏休みのバイト代+お母さんからおこずかいで何とか足りた。

「あー今から楽しみだよね！ ミーナのライブ！」

「ねー！ 早く行きたいね！ あ、ねえちょっとなんか食べたくない？」

「うん、そーしよ。あたしパスタがいい」

「いいねー、行こ行こ！」

あたしたち、狙ってたもの手に入れて超ゴキゲンだった。来週には大好きなアーティスト、ミーナのライブもあるし……。

うーん！ ワクワクしちゃう！

今

この街で、あたしははしゃぎながら走っていた。

世の中は幕を開けた新世紀の訪れに乗って、さまざまな物が溢れてる。

そんな物に囲まれて、あたしはいつもこうして笑ってるの……。

イマが当たり前で、

モノが当たり前で、

この街の笑いが当たり前で。

飽食文化なんてもう死語に近い。

情報化社会なんてみんなが知ってる。

モノも情報も、何もかもが溢れててあり余るくらい。

そんな時代

それが、あたしたちの時代。

新世紀の現代の、女子高生のあたし。

悩み事や悲しいこともあるけど、でも、何不自由なく毎日過ごしてる。

「いらない」

なんて言葉は無意識で。

「つまんない」

なんて言葉は口癖みたいに。

あたしにはこの時代が当たり前だった。

豊かさ？

そんな言葉、あたしの毎日に存在してないようなもの。命？

そんなもの、あたしの思考で改めて考えないようなもの。自由？

そんなもの、あたしの生活のすべて。

今こうしてパスタを頬張りながら、沙耶と他愛もない話をして過ごしてる時間。

あたしは恵まれた自分の環境を、時代を、何も考えずに生きていた。

もしも

あんなコトが起きなければ、きっと一生気づかなかった。ううん。

気づけって言っほうが無理。

改めて考えろって言っても無駄。

人間って自分が経験しなきゃきつとわからない生き物だと思っ。

想像力だけじゃ、追いつかないこともあるよ。

あたし、長瀬胡桃、十七歳。

新世紀の現代で育ったあたしの不思議なお話……。

あなたは信じてくれる？

信じてもらえなくてもいい。

あたしの生きた、もう一つの時代のこと。

誰に信じてもらえなくてもあたしはたしかに生きていた。

この、豊かなイマと、

それから、

あの、悲惨な時代を……。

あの人に出会った時代を

2

ガシャン！

家に帰る途中。

近所のスクラップ工場は相変わらずものすごい騒音を撒き散らしている。

ガラスの割れる音、鉄材を潰す音。

いらなくなつたいろんな物を粉々にしてる音。

そんな音はあたしにとって、だたの耳障りな騒音。

あーうるさいなあ！

この場所って大嫌い。

早いとこ、通りすぎちゃおーっと。

「おーい次はそのでかいのいくぞー」

「なんすかね コレ」

工場の前、従業員の会話が耳に飛び込んできた。

「なんか、筒みたいっすねー。どっから来たんだろ」

「その辺のは、今朝海のほうの工場から来たんだよ。早い

とこやっちまおうぜ」

「そうっすね」

スクラップの機械のスイッチが入れられた。

あたしは気にもとめないで、ちよっと早歩きでそこを通りすぎてた。

でも、

一瞬、ものすごい光が工場を包み込んで、

あたしは振り返った。

(え……?)

って考えるヒマもなかった。

何が起きたのか目で確認もできなかった。

その真っ白な光は工場だけじゃなく、

素早くあたしのことも包み込んだの。

辺り一帯が、スポットライトを直接照らされたかのよう
な光に覆われた、

次の、瞬間。

バアアアアン !

一瞬のことだったけど、あたしの鼓膜はたしかに、その
爆音を捕らえた。

今まで耳にした事のないような、騒音どころじゃないす
ごい音だったのをかすかに覚え
てる。

スクラップ工場から火柱が上がったのも、一瞬横目に映った。

でも、その火が赤かったかどうかはわからない。だってもう、

その時にあたしの意識はなかったから……。

爆音の後の爆風にあたしの体は空へ舞いあがって。

あたし、死ぬかも……。

って、最後の意識で、

あたしはファイ思った

。 。

たくさんの人の悲鳴

サイレンの音。

崩れ落ちる瓦礫の音。

焼け落ちる建物。

恐ろしい惨劇の音

『スクラップ工場で大爆発。原因は空爆か！』
そんな疑惑の記事が出たころ、

あたしは意識を取り戻していた

。 。

悲鳴やサイレンの音はいつの間にか遠くに消えていった。火の熱さも体を感じなかった。

そのかわり、そよそよした冷たい風があたしの頬をかすめていった。

戻ってくる意識の中であたしは。

潮の匂いを感じていた。

潮……。

この音は……波？

鳥……かもめが鳴いてる……。

ザザン……

ザザン……。

寄せては返す、波の音……。

おかしいな。

海に出るには車で三十分はかかるはずなのに……。

波の音なんか家からは聞こえないはずなのに……。

こじこじ、どじこじ……？

うつすらまぶたを開くと、黒緑色した小さなカニが横歩

きしてあたしの目の前をゆっく
り過ぎていくのが見えた。

視界はまだ霞んでいて、イマイチ意識がはっきりしな
かった。

でも、カニを目でおつていくと、下駄を履いた足のつま
先が見えた。

「……………」

小さな足は、あたしが動くとき、ビクツと震えて。

「外国人や……………」

「そつや……………なんやこの髪の色、おかしいで」

頭の上から押し殺したような子供の声が出た。

あたしはその声の行方をたどつて、ゆっくり頭を上げて
起き上がると、

「うわああ！ 起きたで〜！」

「大変や！ 誰かに知らさな〜！」

あたしを囲んでいた子供の輪は、そんなことを叫びなが
ら散つていった。

「……………」

ココ、どこ……………」

頭はまだガンガンするけど、体の痛みはそんなにない。

戻つてくる意識の中であたりを見回すと、白い浜辺だつ
た。

なんだろう、すごく暑い、ココ。

秋の気候じゃないみたい……………」

浜辺だわ……………一体どこの浜？

あたしたしか、スクラップ工場の前を歩いて……………それ
で……………」

今何時だろ……………」

「あつ！」

やだ！ 腕時計！

何気に見たその腕時計であたしの頭はハッキリした。

やーん、せつかくのお気に入り時計なのに……………」

高校入学の時、お父さんに無理言ってもらったアンデー
クな腕時計。

超お気に入りだったのに、ガラスにはヒビが入って、秒
針も長針も止まってしまつてた。

時間はわかんないけど、夕方だったはずなのに、お日様
はあたしの真上にあつた。

なんなの？　ここ、どこのなの？

頭も視界もハッキリしてきたけど、ワケわかんない。

こんな白い砂浜見たことないし、こんな海知らないよ。

太陽はジリジリしてて、夏が舞い戻ってきたみたい。

急に心の中に不安がたち込めて、あたしは立ち上がると、
恐る恐る歩き出した。

もちろんどこに行つていいのかわかんないし、ココがど

こかもわからないけど、

動かなきゃ始まらない！　って思ったの。

浜を抜けて、石が積み上げてある堤防を登りきると、舗
装されていない道路に出た。

道路って言っても車なんか一台も走ってないし、なんだ
か辺りは静かだ。

民家が建ち並んでたけど、どれもこれも板張りの、なん
だかみそぼらしい家。

(何よ……ココ……)

あたしは身を縮めて腕を抱きながら歩いた。

何個か角を曲がると、こじんまりとしたお店があった。

『國山商店』

そう書いてある看板はを見上げると、

あたしの脳裏に小さいころ小学校のそばにあった駄菓子屋
さんが浮かんだ。

それにしてもなんてレトロな店なんだろ……。

看板も、右から左に書いてあるし、ここどっかの撮影所
かなんか？

テレビの中で見たことある……。

『昭和史』とかっていうNHKの教育番組。

お父さんがなつかしがってよく見たもんね……。

そつえばなんか喉渇いたな……。

夏みたいな陽気に知らないうちに汗びっしょりになって
たし、あたしはそのお店に入っ
た。

ガラガラガラってガラスの重たい引き戸を開けると、

「いらっしやい」

っとおばさんが出てきた。

なんだ、このおばさん。

頭に手ぬぐい巻いちやって、剣道部みたいじゃん。

それに、変な服着てるし……あのズボンってなんていうんだっけ？

日本史の教科書で見たことあるような……。そんなのどーでもいいけど、さっきからおばさん、あたしのこと超怪しげな目で見てる。

失礼なヤツー！ あたしは客なんだからね！

あたしはケースにならんだビンのコーヒー牛乳を取ると、ポケットの中のお財布から百二十円出して、無言で渡した。

超カンジ悪い！

ありがとうございますました、くらい言いなさいよねー。

手の中のお金を見つめてるおばちゃんを軽蔑の目で流すと、あたしは黙ってお店を出た。

だいたい、なんでコーヒー牛乳なの？

ウーロン茶が飲みたかったのに。

それにこれ、全然冷えてないじゃない！

もう、超ムカツク！

ブツブツ言いながらも、相当乾いていた喉に、一気にそれを流し込むと。

「ドロボーッ！」

って金切り声が後ろから聞こえた。

え？ なに、泥棒？

あたしが振り返るの同時に、さっきのお店からおばさんが血相変えて飛び出してきた。

「え？」

「ドロボー！ 待ちなさい！」

ちよっと待ってよ……泥棒って、あたし？

おばさんの表情と金切り声に、あたしは頭で考えるより早く、足が動いた。

な、なんであたし走ってるの？

泥棒じゃないのに……お金、ちゃんと渡したのに、なに？

でも、追いかけてくるから怖くて逃げちゃったし、今さら止められないよ！

「ドロボー」

って大声張り上げて走ってくるおばさんの前を、あたしは

全速力で走る。

もう、ワケわかんない！

なんであたしがこんな目に合わなきゃいけないのよー！

ドン！

「うわッ！」

後ろばかり気にしてたせいで、角から出てきた人に体当たりして、あたしはその場にしみもちをついちゃった。

「だ、大丈夫かい？ ごめんね！」

頭の上から慌てた男の人の声がしたけど、あたしはその人と顔を合わす前に、

「先生！ コイツや！ こいつが海にいたんや」

「ほら、ウソやないやろ。外国人やで」

「先生、しゃべってみてや」

「堀内先生！ その子捕まえてくださーい！ 泥棒なのよー！」

泥棒……？ 外国人……？ え？

おばさんの声に驚いたように、周りの家から人が出てくる。

やだ……怖い……。

どうなってるの？ 何かが変だよ。

この街、何かが変よ。

あたしの周りで騒ぐ子供たちはランニングシャツに、薄っぺらズボン。

しかもみんな坊主だし、周りの女の人は変なズボン……

そうだ！ モンペ……だっけ。

教科書で見たことある、そんな名前の布ズボン。

なんか変だよ！ ココ！

「君、大丈夫？」

硬直したのか、腰が抜けたのか、立っていないでいるあたしに、さっきの声の人が手を差し

伸べてくれた。

あらら、結構かっこいい、この男。

薄い麻色のシャツに、チノパンってカンジのズボンに下

駄。

コーデイナートは意味不明だけど、クリクリの黒目勝ちした二重の目と、サラサラの黒

髪に浮かぶ天使の輪が温暖な顔を更に引き立てて……

じゃなくてッ！

「待ちなさい！ このお金はなんなの！」

「ハ―ハ 息を切らしたお婆さんがあたしの後ろに到着すると、野次馬の輪がどんどん大きくなっちゃって、あたし、思わずこのカツコイイお兄さんの後ろに素早く隠れた。」

「な…何よ！ コーヒー牛乳代じゃない！」

「あたしが反発すると、お婆さんは更に顔を赤くして。」

「だから、これは何かって聞いているのよ！」

「このお婆さん、何が言いたいのかさっぱりわかんないんだけど。」

「だいたいなんなの？」

「みんなあたしのことじっと見つめちゃって…。」

「子供たちはあたしの髪にくぎ付けだし。」

「視線が痛いよー！」

「ちよつと見せて」

「童顔の顔の割にこの低い声は、お兄さん。」

「お婆さんからあたしが渡したお金を手に取ると、興味深そうに裏や表を見てた。」

「そんなに百円がめずらしいって言うの？」

「頭が混乱してきちゃう。」

「人がいっぱいだし、みんな変な格好だし、町並みもアスファルトじゃないし、家の近く

「じゃないことははっきりしたけど、やっぱりココがどこかわかんない…。」

「それに、太陽が眩しく照り付けてるし、コーヒー牛乳なんて飲んだせいかな…。」

「なんか、気持ち悪く…なってきた。」

「お婆さんの金切り声が妙に耳障りの騒音になってきちゃった…。」

「先生、これなんなんですか？」

「先生、コイツ外人やで。外国のお金ちゃうか？」

「でもさっき日本語喋ってたで」

「やまない周りの声もうっとおしくて…。」

「ねえ、君」

「って、彼が振り返った時

「(あ….)」

やばいって思ったときにはもう目の前が真っ白。
頭の奥にキーンって金属音が響いたと思ったとたんに、
あたしの体は大きく傾いて。

「お、おい！ 君ッ！」

そう慌てて叫ぶお兄さんの腕の中へ、落ちていった。

3

あれ？ この天井、どこ……？

うつすら目を開けると、視界には見慣れたはずのあたしの部屋
の白い天井に、裸電球がぶら下がってるのが映った。
張りの天井に、

あたし、どうしちゃったんだけ？

たしか……沙耶と買い物に行っ、帰ってくる途中で……。

そう、スクラップ工場の前を通ってたらすごい爆発音がして……、

「あ、目がさめたね」

誰だ、この顔……。

この前のライブで知り合った子じゃないよね……シヨツ
プの店員さんでもないし……。

大体あたしの友達に、こんな童顔で髪の毛が黒い子なんか
いないはずだよ……。

「大丈夫？」

ニコって微笑んで細くなった目を見ると。

「……！」

そうだ、あたし倒れたんだ！

思い出して、飛び起きた。

「あ……あの……」

「心配ないよ。ちょっとした日射病みたいなものだよ」

「え……あの……ココは……」

あたし、ビクビクしながら聞いた。

開けはなれた縁側続きの窓からはオレンジ色の光が差し込んできて、夕方になったんだってことだけはわかったけど……。

お兄さんは笑顔を保ったまま。

「ここは、須江島だよ」

「スエジマ……島？……」

「うん」

「あの……日本、ですよ」

「はは、そうだよ。本土から約三〇〇キロくらいの位置かな」

「本土……？」

「どうなってるの？」

あたし、なんでこんなところに来たんだろう……。

工場の爆風でこんなところまで飛ばされたってこと？

でも怪我は別にしてないみたいだし……それにスエジマなんて聞いたことないわ。

「あの……あたし、横浜から来たみたいなんですけど……よく、わかんなくて……」

「うん。僕もよくわかんない。でもこのお金、君がコーヒ―牛乳買ったって言う……」

お兄さんはさっきのおばさんからもらってきたのか、二〇円を手の平にのせて、視線をそっちに移す。

お金がどうかしたの？

ジーッと黙ったままお兄さんの答えを待ってるうちに、お兄さんの顔からは笑みが消えていった。

あたしより年上っぽいけど、目がくりくりしてるせいですごく童顔の男。

髪の毛は真っ黒できれいにそろえられたセンター分け。

あたしの友達にはいないタイプ of 素朴系な顔立ち。

でもダサいわけじゃなくて、どちらかいったら整った顔だしイイ男、かな。

まー、あたしの求めているタイプじゃないけど。

おっと、そんなことは、どうでもよくて！

「あの……」

「あ、ごめんね。これさ、本当に君にとってはお金のの？」

「は？ あたしにとって？」

「それに……ここに“昭和六〇年”って彫ってあるよね」

小銭には作られた年代が彫ってあるよね。

あたし、お兄さんの言葉にうなずいた。

「あのね……、僕、子供の頃童話で読んだことがあるんだ」

（はあ？）

何が言いたいの？ この人。

「ある男の子が、未来の世界に行くお話なんだけど……。

もしかして、君、その逆なんじ

や……まさかとは、思っただけど……。」

お兄さん、気まずそうにあたしと手の平の小銭を見比べ

て、言葉を切る。

どういうこと？ 未来に行く童話の話しなんか今関係な

くない？

「あの、つまりね、これは僕の推測なんだけど、君は“未

来”から来たんじゃないの」

「はあ……？」

なーに言ってるの？ 未来？

も、もしかして素朴系と偽って、コイツもしかして“オ

タク系”なんじゃないの！

「未来って……SFマンガの読みすぎなんじゃないの？

バツカみたい」

助けてもらっておきながら、あたしは軽蔑したように彼

を見つめた。

でも、彼はキョトンとして。

「えすえふ……？ って何？」

「え？ そんなんも知らないわけ？」

「う、うん」

「SFってのはね……」

「！」

な、なんですって！

あたし、彼の脇に置かれた新聞紙に、そのままき付け
になっちゃった。

だって、だって！

今にも叫びだしそうになりながら慌ててそれを手に取る

と、新聞紙の一番上、

日付のところを見てコーチョコク。

「ど、どうしたの？」

「こ……これ、マジ……？」

「え？」

ウソでしょ？ 信じらんない。

この男が言ってた、バカらしい推測。

あるわけがないって思ってたのに、でも、たしかにそこには。

『昭和十九年 九月二十日』
記されていた。　　。　　つて、

しよ……昭和十九年……?

ちよっと待ってよ、何でこんなもんが、ここにあるわけ……?

「あの、これ……」

「今日の朝刊だよ。それがどうかしたの？」

「今日の……昭和十九年、九月、八ツカ……？」

「うん、そうだよ。今日は二十日だけど……」

きょとんとしてあたしの顔を覗き込むけど、あたし、新聞から目が離せなかった。

顔が強張って、手が震える……。

マジ、で？

ちよっと、これって現実？

ウソ、信じられないよ！

「ねえ！ 携帯貸して！ 家に電話するから！ 早く！」

「けーたい……？ あ、電話なら、〇〇にはないけど……」

家って横浜の？」

「そうよ！ あたし帰らなきゃ！」

「今日は無理だよ。もう船もないし……次に出るのはあ

さってだし。それに、君、疎開し

て来たんじゃないの？」

「そ、疎開……？」

また、教科書用語だ……。

でも、この人の言ってること、ウソっぽくない……。

きょとんとして、ウソを言ってるように見えないし……

じゃあ、これって現実？

「ただいまー！ あ、誠。帰ってるのー？」

向こうの方から若い女の人の声がすると、彼はお出迎えのために部屋を出て、

「あ、お帰り。ごめんね、母さん。配給取りに行かせちゃっ

て」

「ホントよ！ おばさん、まだ本調子じゃないんだからね！」

「いいのよ、春代ちゃん。少しは歩かないとね。それより

あの女の子は……？」

「それが……」

固まっていた顔をゆっくり動かすと、ふすまのところに若い女の人と、中年の女の人
が立っていた。

二人ともやっぱり、“モンペ”にくすんだ麻のシャツを着て、おばさんは手ぬぐいを頭に巻いていた。

女の人も、まるで昔の映画の中みたいな顔立ちをしてる。

あたしは視線を動かして、その立つ人たちや、周りを見回してみるけど、どれもこれも、あたしの知ってるものなんか、何にもなかった。

教科書の中、

日本の昭和時代とかってタイトルをそこにつけたらバツチの風景だわ。

あたしのほうが逆に思いつきり浮いてるっぽいし……。

もう一度見てみた新聞は、やっぱり、

『昭和十九年』。

さつき、『疎開』って言ったよね。

『配給』って言葉も聞いたよね……。

それって、戦争中に使われてた言葉だよね……。

昭和十九年……戦争？

あたし、日本史苦手なんだよね……。特に年代物なんか全然ダメ！

でもたしか、戦争が終わったのって、昭和……二十年、だった。

“未来から来た”って言葉、

そう考えたら、全部つじつまが合う。

でもどうして？

スクラップ工場の爆発、あれは多分夢じゃないよね……。

じゃあ、あの衝撃で？

「ちよ……大丈夫か？ 顔色悪いぞ！」

慌てて駆け寄って来て、あたしの顔を覗き込んでくれたお兄さんの大きな目に。

あたし、

プツン　　って、糸が切れた。

「わああああああん！」

お兄さんの前で、

そう、声を上げてびーび　泣き出しちゃった　。

信じられないけどあたし、

“タイムスリップ”　、しちゃったんだ！

4

「眠れないの？」

縁側で、一人お月見をしていると、後ろから低い声がした。

「あ……ごめんなさい、雨戸勝手に開けちゃって……あの……」

「いいよ。それより、大丈夫？　少しは落ち着いた？」

「……」
あたし、ちよっと考えて、コクンってうなずいた。

正直、落ち着いたわけじゃないけど、“誠先生”にこれ以上心配かけたくないし……。

先生は自然にあたしの隣に腰掛けると、

「きれいな月は、胡桃ちゃん時代のと変わらない？」
って、聞いた。

その後。

あたしがあまりにびーび泣くもんだから、慌てた先生は、家にいた女の人を帰してから、

あたしのお話を聞いてくれたの。

居間の畳の部屋で、ちゃぶ台の上には、先生のお母さんがあたしの気を落ち着かせるた

めに、特製の梅ジュースを入れてくれて。

あたしはそれを飲みほすと、一気に話したの。

自分のこと、自分の生まれた場所や日付け。

あたしの育った時代のこと。

スクラップ工場での事故のこと。

自分だって信じられないんだもん。他人が信じるはずな

いつて思った。

でもね、あたしの話が終わった時、また泣き出しそうだったあたしに向かって先生は。

「童話の中の話だと思ってたけど、実際にあるんだー」

なあんで、超ノー天気なセリフで笑ったの。

深刻になっちゃうと、あたしが落ち込むだろうと思ったんじゃないかな……。

先生って、そんな気遣いが出る人だって、ちょっと一緒にいるだけでわかった。

それにね、先生のお母さんも、

「大変だったわね……。怖かったでしょ」

って、先生に似たきれいな目であたしをいたわるように見つめてくれた。

本当はいまだに混乱してるよ。

夢じゃないかなって、疑ってモいる。

でも、人間って不思議な対応力があるみたい。

自分の身に起こったことがわかってくると、そんなに取り乱さなくなる。

でもさ、あたしには「コ」に知り合いもないし(当たり前か)。

どうやったたら元の時代に戻るかわからないし……(当たり前前だけ)。

それでオロオロしてたらね、先生もお母さんも。

「ここにいればいいよ」
……って。

迷惑なそぶり一つなく、微笑んで言ってくれたんだ。

「あたしの時代の月は、きれいだけど……でも、空気はこんなにきれいじゃない、かな」

「へー。あ、でも、この島は特別だよ。何にもないんだもん」

はは、って白い歯を見せてニコって笑う。

(先生……)

先生、堀内誠さん。ハタチ。

何で先生かって言ったら、お医者さんの卵なんだって。

今は戦争中で島に戻ってるけど、本当は東京の大学に行ってたんだって。

でも先生は優秀だからって、近所のお医者さんがじきじきに色々教えてくれてるみたいなんだ。

で、その病院で助手みたいなことしてるから、みんなから“先生”って呼ばれてるって。

ほら、さっきお母さんと一緒に来た女の人のいたよね。

あの人は岡町春代さんって言って、その病院の娘さんで看護婦さん。

先生とは幼なじみらしいんだ。

あたしもね、“先生”って呼ばせてもらっことにしたの。だって本当に“先生”ってカンジなんだもん。

優しい顔立ちだし話し方も穏やかで、本当に素朴な、でもなんだか頼りがいがあるの。

あたしがね、「帰れないのかな……」って不安な顔したら、先生ね、あたしの頭に手を

乗せてくれて、ふんわり撫でながら。

「時間とか空間を説いた科学者の文献を見てあげるよ。何か見つかるかもしれないよ」

……って。

こんな時代にそんなことがわかったら、あたしの時代にはタイムマシンが出来ててもいいんじゃないかって思うくらいアテにならない言葉だったけど、あたしうれしかった。

先生の大きな手。
とーっても温かくて、なんだか甘えなくなっちゃったんだもん。

あたし、ひとりっこだし、甘えん坊なところがあって（恥ずかしながら）、その性格今は丸出し。（だって誰一人知らない世界なんだからねー！心細くて当たり前じゃん）

だから先生の手、とっても頼もしく思えたんだ……。

「もう寝ようか。ね？」

「あ……先生……。あの、あたし本当にココにいてもいいの？」

「え？ どうして？」

「だって今って戦争中だよ。あたしたちの時代には戦争はなくなってるからあたし、そ

の大変さとか実感したことないけど食べることも大変なん

でしょ？ 学校で勉強したよ」

「へー……。胡桃ちゃんの時代になったら戦争はなくなるんだ……。よかった……。」

月明かりの中で、先生はフウつと小さな溜息をついた。
「やっぱり戦争ってやってる本人たちも、嫌なもんなのかな？」

「別に心配しなくてもいいよ、って言っても、うちも裕福じゃないからあんまりたいしたこと出来ないけど。あ、でも、この島はとりあえず今のところ空襲もないし、安全だから

心配しないで」

「先生……」

戦争がどんなものかわかんないけど、でも怖いのは嫌だし、この時代にほっぼりだされるのは正直、絶対イヤ！だし。

先生は超がつくお人よし。

こんな人間、滅多にいないよ。少なくともあたしの周りにはいないな。

こんなワケのわからない未来人のあたし。

髪の毛は栗色だし、スカートは短いし、“外国人”とか泥棒”あつかいされちゃったあたし。

普通の人なら優しくするどころか、警察とかに突き出しそうなもんなのに。

アツサリ、あたしの言うことを信じてくれた。

何の疑いもない屈託のない笑顔を絶やさないであたしに接してくれる。

先生も、先生のお母さんも、ホントお人よし。

ムコウの時代でこんな人たちに会ったら、あたしもしかしたら『ウザい奴』ってツンケ

ンはねのけてバカにしたたかもしれない（性格悪いかなあ？）

でも今は、わらをもつかむ思いだし、いっぱいいっぱいだし。

先生のお人よしに甘えさせてもらうことにしたんだ。

「おやすみ、胡桃ちゃん」

「おやすみなさい」

四畳の狭い畳の部屋に薄っぺらい布団。

裸電球に、やたらうるさい柱の時計。
隣にはさっき出会ったばかりの先生のお母さんが眠って
る。

タイムスリップ……。

あたしの人生にこんな不思議なことが起こるなんて思っ
てもみなかったよ。

何が何でも絶対に帰らなくっちゃ！

先生たちはとてもいい人だけど、ココに長居するつもり
は全くないもん！

携帯もテレビもMDも何にもないこんなところ、
ずえ　　ッたいにイヤ！

明日からのことを考えるとちよつと不安になる。

あたしは布団をかぶると、ぎゅっと目を閉じた。

次に目を開く時は、自分の部屋に戻っていますようにっ
て、

心から祈ったんだ

5

毎晩眠るたびに、目が覚めたら自分の部屋のベッドの中で
ありますようにって祈ってた。

でも、結局そこは思いっきりレトロな昭和の家で、

フワフワのベッドとは大違いのせんべい布団(TVの受
け売りだけど)。

タイムスリップ、十日目の朝……。

(やつぱり今日もダメだ……)

布団をたたみながら、このムシムシした空気に嫌悪感を
覚えつつ溜息。

毎朝の日課になっちゃったよ。

布団の上げ下げも慣れたもんでしょ？

ベッド育ちのあたしとしては結構めんどくさいんだけど、
なにせ居候だから文句も言え
ないしね。

「胡桃ちゃん、ごはんだよー」

「はあい！」

こんな怪しい未来人のあたしだけど、

今じゃすっかりモンペに薄い麻色のシャツなんか着

ちゃってる。

トホホ……おしゃれ大好きの胡桃はどこへ？ ってカンジよ〜！

でも毎日制服じゃいられないし、シャイな青年の先生は（あたしのスカートの短さが気に

なるらしく）お母さんに頼んであたし用のモンペを作ってくれたの。

そんなんされちゃ、『イヤー』とも言えないでしょ？ 居候だし。

ご飯だつて。

ちやぶ台にそろえられた朝食。

うげ！ まだやっぱり抵抗があるわ！

むぎごはん（味なし）に、お母さんのガーデニング（？）

野菜の入ったお味噌汁。

漬物と、お隣によく鳴くニワトリさんからもらった卵。

多分、この時代にとっては結構なご飯だと思うんだけど……。

「胡桃ちゃん、少しはこのご飯にも慣れたかしら？」

「そうそう。初めの朝はびっくりしてたもんね」

「はは……。うん、慣れました……。おいしーです」

（わ〜ん！ 焼きたてトーストに、サラダとハムエッグが食べたいよ〜！）

でも言えるわけではない。

あたしは未来から来た、居候だもん（しゅん）

タイムスリップ十日目。

この世界にもちょびつとだけ、慣れた。

自分の中にこんな適応力があつたなんて、ビックリよ！

沙耶みたいなお嬢様な子なら、いまだに泣いてるかもしれないけど。

映画の世界、ドキュメンタリーの番組みたいな、昭和レトロな世界。

胡桃は結構、がんばってるのだ！

メソメソするのはあんまり好きじゃないし。

あたし、蟹座のO型だから、前向きっていうか、物事深く考えるの苦手だし、単純だし。

帰れるまではとりあえずこの時代の人と仲良くして生活してたほうが得だつて思ったんだよね。

それが十日かけて考え出した結論。

タイムスリップを受け入れるための答え。

え？ ずいぶんアツサリしてるって？

うーん、あたしもそう思うけどさ、一緒に暮らしてくれてる先生親子があたしに対してよくしてくれるからさ。

お母さんなんて体が弱くて病み上がりなのに、あたしのためにモンペやらシャツやら用意してくれたんだから！

誰かによくしてもらったら、自分もメソメソしてるより笑ってるほうが恩返しって言うか……そういうものかと思って。

最近の女子高生はどーのこーのって言われるけど、ちゃんと常識だってあるんですー！

それにさ、泣こうがわめこうが、今は何をしても戻れそうもないじゃん？

だったらここでどう暮らすかを考えた方がポジティブかな、って。

あたしの性格上、そうとしか考えられなかったんだもん。

とにかく、この須江島で生活を始めた胡桃なのだ！

須江島。

あたしの知識内じゃ聞いたことない島だけど、それも当たり前前かも。

一周八キロしかないんだって。

海に囲まれて、内陸部は山になって、人口はわずかに百人。

あたしを泥棒あつかいしたおばさんのお店が唯一のお買い物スポット。

それから先生のいる岡町病院が、唯一の診療所なんだって。

ホント、都会っこのあたしには考えられない世界だわのんびりしすぎてて呆れちゃう。

本当に戦争なんかしてる時代なのかしら？

ココの空気は本当に穏やかで、静かな時を刻んでいる感じがする。

食べ物も育ちやすいし、山の中にはたくさんの実の木があつて、配給以外にも、食べ

物はそれなりの生活が出来るくらいあるみたいよ。

先生は空襲は来ないって言ってたけど、時々空に黒色の戦闘機みたいのが飛んでるのを見かける。そうするといわれようのない不安にかられるの。

だって！

日本は戦争に負けちゃうんだよ！

とても……絶対にこの時代の人たちには言えないけど、あたしはその事実を知ってる。

怖い原爆のことも知ってる。

たくさんの人たちが死んでしまう事実を、あたしは知ってる……。

でも、そんなこと、言えるわけがないよ……。

「あー、胡桃や！ 外人の胡桃やでー」

「あ！ 正太！ また外人って言ったわね！」

「そうやんか。胡桃の髪の毛外人や！」

「コラ！ 正太」

先生と病院に向かう途中、あの海で出会った悪ガキどもがあたしを囲んで笑うのに、隣にいた先生が。

「胡桃ちゃんは、先生の大学の友達なんだぞ！ そんなこと言うな」

「じゃあ、なんで髪黒くないんや？」

「だからそれは何度も言うように、東京では流行ってたんだよ」

「何で先生は染めなかったんや？」

「そんなの、僕がこの色にして似合うと思うか？」

「……似合わへんと思うで」

「はーい！ あたしもそう思う！」

悪ガキ正太の隣であたしも手を上げて賛成しちゃった。

あたしまで言うのに、先生、苦笑い。

「胡桃ちゃんまでそんなに変かな？」

「変やないけど、先生がそんな色の頭にしたら、わいは笑い死にするで」

正太と目を合わせると、あたしたちは栗色の髪の毛の先生を想像して笑いだした。

胡桃は大学の友達。

栗色の髪の毛の色は東京の流行。

ウソの苦手な先生らしい発想でしょ？

しかもこれ考えるのに二日もかかっているの。

あたしが未来人ってことは、お母さんと先生以外、秘密！

あたしは別にかまわないけど、先生が島のみんなのさらしもんにされるのは目に見えてるから、言わないほうがいいって。でも、そうかもしれないよね。

泥棒騒ぎの時、野次馬に囲まれてすっごく怖かったもん。先生の言うことにはあたし、素直に返事するようになっているんだ。

あたしの毎日は、ほとんど先生と一緒に。

卵から孵ったヒナが初めて見たものを親だっと思ってちゃう習性があるじゃない？

あれと似たようなもんかな。

タイムスリップしちゃったんだ！って思った時、そこにいたのが先生だったから。

なんだか先生のそばにいないと落ち着かないんだ。

先生のそばじゃないと、この世界に放りだされた気分になっちゃうの。

邪魔かもしれないけど、こうして毎日、先生と病院に行ってるの。

「おはようございまーす」

「お、来たな。胡桃ちゃん」

「おはよう、誠、胡桃ちゃん」

玄関のドアを開けるとすぐに診察室っていう、驚きの狭さの岡町医院。

いつもあたしと先生を迎えてくれるのは、ロマンスグレイ、とは言いがたい、ただの白

髪まじりの太った先生と、娘の春代さん。

春代さんは絶対に亡くなったお母さん似なんだって思うほど、似てない親子。

でも二人ともとってもカンジのいい人なんだよ。

あたし、先生と大学のお友達っていう設定じゃない？

だからあたしもお医者のお卵だと思われてて、岡町のおじさんはいろんなことを教えてくれる。

っていつても、日本史の年代すら覚えてないあたしが医学なんて理解できるわけないんだよね。

そこは先生がちゃんとフォロー入れてくれるし、あたし
大学では落ちこぼれてましたっ
てキャラにしてごまかしてるんだ。

「胡桃ちゃん、おいも食べない？ 甘くておいしいわよ」
春代さんが診察室の隣にある台所からふかしたさつまい
もを持ってきてくれる。

「あ、ありがとうございます」

「はー、何でこの時代の人はおいもばっかなんだろっ…。
チョコレートとかポッキとか食べたいな…。
そのかわりダイエツトにはもってこいだけど…。十日で
顔がシャープになったわ。

あたしはそんなことを思いつつもおいもをかじる。

「あまあーい！ 超おいしー！（現金な奴でしょ？）」

「誠も食べたらず？ 笹山さんからいただいたの」

「へー、笹山のおじいちゃん腰痛は大丈夫なのかなあ？」

「また顔出してあげたら？ おじいちゃん誠に会いたがつ
てたわよ」

おいもの甘さにひたりながらも、あたしはしっかりと横目
で二人をチエツク。

春代さんは、先生より二つ年上の二十二歳。

大人！ っていうか、落ち着いてて超ステキなんだ。

シヨップの店員さんとかと比べると、断然大人だわ。

シヨップのお姉さんたちとは比べものにならないほど落
ち着いた雰囲気をかもしだして
るのよねー。

これぞまさしく、やまとなでしこ！ スツピン美人！

ちよっと、憧れちゃう…。

ニコニコ笑い合う、先生と春代さん。

二人は幼なじみ、って先生は言ってたけど、本当は“恋
人同士”なんじゃないかなあ？

先生はボケ っとしたカンジの素朴青年だから鈍感かも
しれないけど、

春代さんの方は絶対に先生を好きなんだと思う！

あたしが先生と初めてここへ来た日、すごく不安そうな
顔であたしを見ていたのでピン
ときちやっただ。

こんな時代にも、“恋”ってあるんだなあ…。

当たり前かもしれないけど、なんだか新鮮。

だって、この時代の人たちってあたしのおじいちゃんやおばあちゃんに当たるんだもん。

おじいちゃんやおばあちゃんも、ちゃんと恋をしてたなんて、考えたこともなかったけど、でもそれがすごく新鮮で、こうした恋のおかげであたしは生まれて来れたんだなとかって実感しちゃった。

老人にもちゃんと青春時代があったんだなーなあって、かわいいよね。

「胡桃ちゃん？ どうかした？」

あたしのニヤニヤした視線に気付いた先生が、あたしを見た。

「え？ あ、ううん。何でもないよ」

「具合悪かったらちゃんと言えよ」

「お、誠君、すっかり胡桃ちゃんの兄貴分だな」

「そんなんじゃないですよ」

先生が照れたように首を振るから、みんなで笑っちゃった。

先生ってカワイー！ 三つも年上に思えないよ。(ホントは五十歳以上違うんだけど)

センター分けの黒い髪に、黒目勝ちのクリクリの目。

そうだなー、動物にたとえたら……リス？ (あ、ピツタリかも)

性格もそこらのお医者さんみたいに気難しくなくて、きょとんとして時々ボケっとして

るの。天然派なのかな。

男の天然ってあんまり好きじゃなかったけど、先生のは、愛嬌に見えちゃうんだ。

今日も一日診察を終えて。

先生と二人で歩く帰り道。

「胡桃ちゃん、少しは慣れた？」

「ううん。慣れたっていうか……先生たちといるとあんまり不安にならなくなっただけかな」

「ならよかった。色々本読んでるんだけど、そんな話なかなか見つからなくて。ごめんね」

「やだ！ 先生。そんなの当たり前だよ。あたしの時代に

だつてタイムスリップなんて想像

像や空想のお話の中にしか出てこないもの」

「でも……帰りたいだろ？ 元の時代に」

しゅんとした目で、先生があたしの顔を覗き込んだ。

別に帰れないのは先生のせいじゃないし、ここに来たのも先生のせいじゃないのに。

どうしてそんなに優しい目で他人が心配できるんだらう？

お人よしの天然の、不思議なほど純粋な先生の目。

あたし、実はそんなに嫌いじゃない。

元の時代にはいなかったタイプの男の人。

ライブハウスで一緒にはしゃげるような明るくてオシャレな男が好きだったけど、

先生の素朴さ、そんなに嫌いじゃないよ。

だからあたし、耐えられてるのかもな……。

先生みたいな人がそばで支えてくれるから、こんな不思議体験にも平常心で生活してるのかもしれない。

実はあたし、

こうして先生と歩く帰り道が一日の中で一番好きなんだ。

夕焼けの中を、先生と肩を並べて歩く海沿いの道。

この時間があたしの心を穏やかにしてくれてるんだよね。

この時間だけは、心に絶えず住みついてる不安な気持ち
が和らぐんだ。

「帰りたいけど……でも、先生がそんなに気にしてくれなくていいよ。先生にはたくさん

迷惑かけちゃってるし」

「そんなのはいいよ。気にしないでよ。それにさ……」

「ん？」

先生はいたずらっぽく笑つと。

「それに、胡桃ちゃんもしかしたら僕の孫になるかもしれないしね」

「えー！ ヤダ先生つてば。あたしの苗字は長瀬だよー。

先生の孫にはならないよあ〜」

「あ、そっか」

もー、先生つてば、ホント天然入ってるなあ。

でもあたし、知ってるよ。先生がこんなすつとんきょうなことを言い出す時は、あたし

を元氣付けてくれようとしてる時ってこと。

たった十日しか一緒にいないけど、でも、先生の不器用ななくさめ方、ちゃんとわかる。

あのね、あたしがこの時代に来たばかりの頃ね、よく部屋の隅っこで泣いてたの。

いっくら前向きで深く考えるのが苦手な胡桃でも、そりゃ落ち込むでしょ？

その時にね、先生はいろんな話をしてくれたの。

この時代にはさ、ゲーセンもボーリング場もカラオケボックスもない。

気を紛らわすものは何もなくて、逆に時間ばかり持て余してたけど、でもそんな時先生が聞かせてくれたお話。

小さい子供が聞くような童話や、この島の伝説や……初めはつまらなくて、逆にイライ

ラしてたけど、先生の童顔に似合わないギャップのある低い声だけは、聞いてて気持ちよかつたんだ。

この人のそばにいれば安心かも……って、自然とそう思えたんだよ。

タイムスリップしちゃったのはビックリの出来事だけど、先生と出会えたことは得だったかな、なんて。

あ、別に好きとかそんなんじゃないよ。

先生はきつと春代さんが好きなんだろうし、二人はお似合いだし。

そう。岡町のおじさんが言っみたいに、兄貴。

ひとりっこのあたしにとって、先生は優しい“お兄ちゃん”ってカンジなの。

安心して甘えられる、お兄ちゃんみたいな人。

誠先生はあたしにとって、そんな人なんだ。

「先生！ 早く帰ろ！ お母さん待ってるよ」

「うん」

昭和の時代へタイムスリップして、先生の家にホームステイのあたし。

こんな不便な生活は大嫌いだししんどいけど、

でもここは、人の優しさを純粹に素直な気持ちで受け入れられる不思議な場所。

夕焼けにオレンジ色にキラキラ光水しぶきや。

残暑の暑さや。

初秋の風や。

そこらへんにすすきが伸び始めてたり、こおろぎが鳴いてたりする。

おじいちゃんやおばあちゃんって持ったことないから、田舎がどんなものか知らないけど、都会とは一八〇度違うこの自然いっぱいの世界。

空は三六〇度パノラマで。

まさにこれこそ、ザッツ・ジャパンってカンジだよな。便利なものがないから、先生の手を頼りたくなるのかな？自然に囲まれてるから、人の心も大きくなるのかな？

ココと、ムコウ……平成のあたしの家は、今頃どうなっているのかな？

フと、夕焼けの涼しくなった風を髪に感じると、思い出す。

お父さんもお母さんも心配してるかな……。

時の流れはどんなカンジなのかな……？

今ごろ搜索願いとかが出されてたらどうしよう……。

誘拐事件になんてなったらどうしよう。見つかるわけないもん。

「……胡桃ちゃん？」

「え？」

先生の声で我に返ると、先生はあたしの目を覗き込んで、ニコって笑う。

それでね、子供をいいこいいこするみたいな手つきで、

あたしの頭をぼんぼんって撫でてくれた。

「先生……」

「胡桃ちゃんが未来から来たのには、もしかしたら何かわけがあるんじゃないかな」

「ワケ？」

「そう。人間の一生の中には神様が用意した運命がいくつもあるんだよ。そのうちの一つ」

の運命に過去へ行くことがあったんじゃないかな」

夕焼けの踊る先生の顔をまっすぐ見つめてあたしは話を聞く。

「過去へ行って何かをしたり誰かに出会ったり……。きつと胡桃ちゃんがここに来たのに
はちゃんとした意味があるんだと思うよ」

(過去へ来た、意味) ?

「それが見つかつた時、胡桃ちゃんは未来の時代に戻るのかもしれないよね……。なんて適当な意見かな」

照れ笑いする先生に、あたし、ぶんぶん首を振つた。

「ううん！ そんなことないよ。先生の言う通りかもしれない。あたしもそう思う……。ううん、そう思いたい！」

過去へ来てしまったことには何か意味がある。

そんなのなんか、ロマンチックだよな！

そう思ったら、また元気出てきちゃった！ あたしって単純？

そんな元気な笑顔になつたあたしを見ると、先生は満足そうに笑つて。

「よし。じゃ、家まで競争な！」

「えー！ ちょ……。先生待つてよー！」

突然走り出した先生の後ろを、あたしも慌てて走り出す。

もー、下駄のクセしてなんでそんなに足が速いのよ！

しかもいつもはボケ っとしてる天然のクセして……。

でも 、不思議……。

こうして先生の背中めがけて走つてるのって気持ちがいい。

自然がいつぱいの道を走るのってすがすがしい。

こんな気持ち、知らなかつた……。

都会に育つて、遊びはカラオケやゲーセン。

どこにでもいる女子高生のあたしがタイムスリップした意味。

なんだかそれを探そうと決めたとたん、道が開けたみたいな素直な気持ちになれた。

タイムスリップ。

昭和レトロな、この世界で。

あたしはこれから何を見つけて、何に出会つんだろう……。

ちよつとだけ、のぞいてみたい。

ちよつとだけ、期待したい。
ちよつとだけ、ワクワクしてきちゃった。
長瀬胡桃、蟹座の〇型。
単純でお気楽な性格はここでも健在みたい。
よっしゃ！へこむのやめた！
こんな不思議体験、楽しまなくっちゃ損だよね！

なぐんで、お気軽に思ってた、
けど

6

ウウウウウウ
まるで地響きのようなサイレンの音。

さっきまで夢の中、気持ちよく眠っていたあたしには、
大きな音の目覚し時計に思えた。
でも、

隣に寝てたお母さんは飛び起きて、
向こうの部屋から慌てた声で先生が飛び込んできた。
「空襲だ！防空壕へ！」
(え……！)

ワケわかんなかった。
でも先生の表情はいつになく真剣で、強張ってた。
お母さんもあわてて枕元の防空頭巾（小学生の頃持ってたやつね）をかぶって長靴を履く。

「胡桃ちゃん！早くしなさいっ！」
穏やかなお母さんの荒々しい声に、あたしは慌てて同じように防空頭巾をかぶって長靴を履いた。

(ちよつと待ってよ……これって……)
これって、空襲!!!?

先生は家の中の貴重品袋みたいのを肩にかけて、お母さんも同じようなバックを肩にか

けた。
「胡桃ちゃん！おいでッ」

なんなのよ、これ！
サイレンの音が止まないよ……怖い！

怖いよ！

あたし、その場の雰囲気と、光のない闇の怖さに震えて腰を上げられない。
安全だって言ったのに……ここは大丈夫だって言ったのに……。

誰かあのサイレンを止めてよ！ 怖いよ！

(助けて！)

耳をふさいでその場に丸まったあたしが、そう叫んだ瞬間。

あたしの体がふわって浮き上がった。

(先生……！)

「母さん！ 早く行って。胡桃ちゃん、僕につかまってるよ！」

そう叫んだ先生の声、あたしは耳元で聞いたの。

先生は腰を抜かしたあたしを、抱き上げてかつぐと、そう言って家を飛び出した。

あたし、怖くて目え開けてらんなかったから、

ただ一生懸命に、先生のシャツを握り締めてた。

足手まといになってるのわかってる。

でも、鳴り止まないサイレンの音と、聞こえてくる島の人の騒がしい悲鳴にも似た声が

怖くて……怖くて、先生から離れられなかった……。

防空壕 教科書用語の洞穴。

TVの戦争映画で見るより狭くてムシムシしてて人がひしめき合ってた。

みんな同じように防空頭巾を深くかぶって身を縮めてる。中は真っ暗なのに、人の目だけはキラキラしてて、それが浮き上がってるみたいで異常に怖かった。

「胡桃ちゃん……大丈夫？」

小さな声で先生がつぶやく。

あたし、ガタガタ震えだしちゃうし、背中にべったり冷や汗かいちゃって、『大丈夫』っ

て返事したいのに口が思うように回らない。

でも、つかんでる先生のシャツをもっと強く握り締めて合図した。

だけど本音は恐怖と不安でいっぱいだった。
こんなところで死ぬのはイヤ！ 絶対にイヤだよ！
空襲ってどんなものなの？

歴史の教科書、思い出して……がんばれ胡桃、思い出すのよ！

須江島って一体どんな被害があつたんだろう……何もないの？

冬の寒さに凍えるみたいなのを起こしながら、あたしは一生懸命に学校の歴史の教科書をページページめくっていく。

須江島、須江島……ああ！ だめだ、思い出せないよ！
こんな島の名前やっぱり聞いたことないもの！ どうしたらいいのよ！

バリバリバリバリ

ポオオオオ

「キャ……！」

遠くから爆音と機関銃の音が迫ってくるのが聞こえる。
あたしの恐怖は限界ギリギリだった。

だって、普通に生きててこんな経験しないでしょ！ 平成の時代にはないもん！

あたし、戦争なんて知らないもん！

「胡桃ちゃん！ 大丈夫だから！ しっかりして！」

先生が震えるあたしの体をグツと抱きしめてくれる。

それでも、震えはおさまらなくて、涙がポロポロ溢れてきた。

みんなじつと我慢して、恐怖を押し殺しているのが背中
で感じられたけど、同じようになれない。

先生のシャツに顔をうずめて、あたしはひたすら『死ぬのはイヤ！』って心の中で叫んでた。

タイムスリップを楽しんじゃえなんて思った自分がアホ
みたいだって思った。

戦争を甘く見てたんだ、あたし……。

映画の中だけしか見たことなかったし、こんなにも恐怖だ
なんて知らなかった。

戦争なんてずっと過去の、あたしには関係ない出来事
だって、ずっと思ってたのに！

「キヤー！」

防空壕の中に、悲鳴が響くと、静かだったところが急に慌しくなつて、

「岡町先生！ 先生 ！」

何……？ 何があつたの？

どこにいたのかはわからないけど、この中には岡町のおじさんがいるみたい。

みんなが闇の中を手探りで何かをしてた。

「誠！ 誠いないのか！」

「は……はい！」

闇の中から岡町のおじさんの声。

先生はそれと呼ばれるとあたしから離れようとしたけど、あたし、先生の手を離せなかつた。

先生について、入口の方へ行くと、うつすらとした月明かりの下に、強張つた顔で慌てる岡町のおじさんと、その前には。

「キヤッ！」

あたしは思わず小さく叫んだ。

そこに横たわるのは、頭から血を流してる男の人。

「春代、水を！」

岡町のおじさんは水筒を受け取ると、その人の傷口に水をかける。

するとその人の苦しそうな低いうめき声が耳に響いた。

イヤ！

こんなところ、もういやっ！

恐怖の限界点なんてとくに超えてたかもしれない。

あたし、もう一秒でもそこにいたくないって、体が拒否反応を起こしたの。

「胡桃ちゃん！」

つながれた先生の手を自分から離すと、あたしは防空壕を飛び出したの！

よ！
こんなのヤダ！ 人が死ぬところなんて見たことないよ！

あんなにたくさん血なんて見たことないよ！

耳をふさいでも目を閉じてても、あの横たわった男の人の

うめき声と、どす黒い血の色が鮮明に浮かんで来て、気が狂いそう！

走って走って、道なんかワケわからなくなってた。

バリバリバリって言う戦闘機の音や、サイレンの地を這うような低い音の中、あたしは闇雲に走ってた。

怖いっていう感情、それさえも麻痺してるみたいに、何も考えられなかった。

でも。

バアアアアア　　ンッ！

ピカって何かが海の向こうで光ったと思ったら、そこに水柱が上がったのが、一瞬見えると、体が揺れた。

地震？

「胡桃ッ！」

体の揺れに足の止まったあたしを、後ろから誰かが叫ぶように呼び止めると、

彼はあたしに覆い被さって。

二度目の爆音は、彼の胸の中で聞いた。

「せ……せんせえ……」

「大丈夫？ 怪我はない？」

息がかかる距離で、先生の顔、暗いはずなのにはつきり見えた。

急に、体の力が抜けたみたいに、あたしはへなへなとまた、泣き出しちゃった。

「大丈夫だから、僕がいるから」

先生は、またあたしを抱き上げると、

浜の岩場に身を隠した。

防空壕の中より爆音は聞こえるし、海の水が跳ね上がる音と同時に、島全体が揺れてさ

つきよりも恐怖は近くにあるはずなのに、

なんだか、不思議

月明かりの淡い紫色が先生の顔を照らし出すのを見てたら、あたし。

心が落ち着いてきた。

砂のついたあたしの手を、先生は強く握り締めて、あたしにかぶさるように抱きしめて

くれた。

守られてるんだって、安心感。

こんな落ち着いた気持ち久しぶりに味わった気がする……。

耳元に聞こえてくる先生の鼓動が、心地よくなって眠る直前の安堵感みたい。

大丈夫だよ、先生……、あたしもう平気。

恐怖の世界はすぐそこなのに、ここだけは別世界だね。

先生のぬくもりは、春のふんわりした暖かさみたいだし、先生は海とお日様と草の匂いがする。

あたしの知ってる男の子は、みんなこんな温かくなかったよ。

こんな自然の匂いはしなかった……。

こんな、あたしに安堵感をくれなかったな……。

「胡桃ちゃん……もう、行っちゃったみたいだよ」

長かった爆音や揺れがいつの間にかおさまって、気付くとうつすらと朝もやが立ち込める時間になっていた。

「先生……、ごめんね……」

「え？」

「あたし、混乱しちゃって……迷惑、またかけちゃった……」

本当に反省しなくっちゃ。

しゅんとしてへこんでるあたしに、先生は。

「いいよ。迷惑なんかじゃないよ」

あつさり笑ってくれた。

「あの、さっきの男の人は……？」

「大丈夫だよ。岡町先生がいれば平気だよ」

よかったあ~~~~！

気になってたんだ、あの人のこと。

あたしが飛び出して、きつと先生はすぐに追いかけてくれたんじゃないかと思って思ったの。

心配性で優しい先生のことだもん。

きつとどちらも放っておけなかったはずだよね。

あたしを選んでくれたこと、怪我をしていた人に申し訳ないって思いつつ、うれしいな。

「なにニヤニヤしてるの？ 胡桃ちゃん」

「え？ そんなことないよー」

やっぱりあたしって単純かなあ？

空襲の時はびーびー泣いてたのに、今じゃすっかりゴキゲンを取り戻してる。

先生は現金なあたしの笑顔に呆れたように、でも安心して微笑んだ。

夜が明けそうな、カウントダウンの入った不思議な時間の浜辺は穏やかな静寂に包まれていて。

あたしは岩場から出ると、大きく一つ伸びをした。

うーん、新鮮な空気。おいしー！

「胡桃ちゃんって肝がすわってるよ」

「え？」

「普通初めて空襲に合ったあと、そんなすがすがしい顔できかないよ」

「えー、そりゃ怖かったけど……」

（先生がいてくれたから　　）

「ん？」

「ううん、何でもない！ でも、また空襲ってあるのかなあんな怖い目、出来ればもう二度と起きないで欲しいんだけどなあ……」

先生もこの質問ばかりは真剣な顔で首を振った。

「ない、とは言い切れないだろうな。戦争はひどくなる一

方だし、僕にもそろそろ召集命令が来るかもね」

「シヨウシュウ……メイレイ……？」

「兵に入りなさいって言う命令だよ」

（そんな……！）

先生はサラリと言うけど、あたし、一瞬背中がゾクっとした。

だって、兵に入るってことは、戦場に行くってことじゃ……、

「そんなのダメ！ 戦争になんて行っちゃダメ！」

あたしは先生のシャツを握って叫ぶように言った。

突然血相を変えて言うあたしに、先生はア然としていたけど、でも……

「戦争になんか、行っちゃダメだよ……！」

日本は負けちゃうんだから……そんなことは、日本史の

苦手なあたしでさえ知ってる事

実。

きつと未来は変わらないよ。

それを知って先生を戦争なんかに行かせられないよ！

こんなに優しく、こんなに温かくて、それにお医者さんになるっていうちゃんとした

目標を持ってがんばってる人が。

どうして戦わなくちゃならないのよ！

「胡桃ちゃん……」

「人殺しなんて、先生には似合わないよ」

(どうせ、日本は負けるんだから)

心に思ったその事実だけはやっぱり言えなかった。

先生は驚いたようだったけど、だんだんと朝日が登るとともに微笑を取り戻して、

「君は素直な子だね」

「え？」

「戦争へ行くなっていう気持ち、そんなふうに言葉にする人はこの時代にはいないよ」

「そんな……。そんなことないよ！ 先生が戦争に行っちゃったらみんな悲しむよ！」

反発するあたしに、先生は静かに首を横に振った。

「悲しむんじゃなくて、みんな誇りに思うんだよ」

「誇り……？ 戦争へ行くことを？」

「そうだよ。お国のために命を投げ出すってこと、ある意味、すごく誇らしいことなんだ

よ。僕だってそう思ってるよ。戦場で戦って、お国のためになら死んでもいいって……」

「そんなのウソよ！ 死ぬってことは誇りでも何でもないよ！ 何で国のために命投げ出せるの？ そんなのバカらしいよ！」

「胡桃ちゃん！」

吐き出したあたしの言葉を、先生はいつもより低い声でピシャっとはたいた。

先生、コワイ、表情……。

「胡桃ちゃん、そんなこと言わないでよ……。未来の君が……僕らがつないだ命を受けつ

いだ君が、そんなこと言わないでよ……」

先生は、怒ってるんじゃないか。

先生は 悲しそうに微笑んでた……。

あたし、そんな表情見たら、言葉が後に続かなくなっちゃった。

だって……、恥ずかしかったんだもん。

戦争で死ぬことがバカらしいだなんて……あたしに言う資格なんかない。

あたしは新世紀の日本でのほんんと暮らしてた。

先生たちの時代のことなんか、何一つわかりもしないで……。

そのことが、急に恥ずかしくなっちゃったんだもん。

「ごめんなさい……」

「謝らなくてもいいよ。僕と君じゃ生きてる世界の事情が違うんだからさ。でも、ちょっと安心したな」

「え……？ 何を？」

「胡桃ちゃんの時代の人は、死ぬことが誇りじゃないだなんて。日本はそんなにも平和な世界になるんだね」

先生は見たこともない五十年以上先、未来の日本をあたしの瞳に見ているみたいだった。

そんな先生に、胸を張って『うん！』って返事できないのは、

一瞬走馬灯のように浮かび上がった毎日起こる事件のニュースだった。

日本は平和、かもしれないけど……、

死ぬことは誇り、じゃなかもしれないけど……、

でも、殺人事件のニュースはまるで生活のBGMのように、毎日ブラウン管の中から伝えられてる。

平和に見える日本。

でもその中に渦巻く、命の価値は、どんどん下がってきてるように、あたしには思えた。

ムコウの時代にいた時は、そんなこと改めて考えたこともなかったけど、でも、先生に

『うん』ってうなずけないことが、とても悲しくなっちゃった……。

「胡桃ちゃん？ どうかした？」

「え……、ううん！ 日本はね、平和になるよ。戦争はし

ませんっていう法律ができるか

ら……。だから、うん……。平和に、なる」

「そうなの！ スゴいな！ そんな法律ができるだなんて……。ねえ胡桃ちゃん。もっと

未来のこと教えてよ！」

「え……」

「あーでも、聞かない方がいいかな。楽しみがなくなっちゃうかな？」

先生、子供みたいに目を輝かせてワクワクして言う。

なんか、悲しいな……。

こんなにも平和な日本に思いをはせる人がいるのに、あたしたち、新世紀の日本人はそ

んな平和にめくめく甘えて、平和の貴重さに気付きもしないだなんて……。

(先生、ごめんなさい……)

口には出せないからあたし、心の中で何回も繰り返した。

「あたしの時代には……とつてもね、医学は進歩するよ。

たくさんの方が病気から救われるよ」

「本当？ すごいな」

「先生のきつとお医者さんになってたくさんの人を救ってるよ。もしかしたらあたしの時

代になったら、先生、どこかの病院で院長先生になってたりして」

「院長！ そんな器じゃないよ、僕は」

「そんなことないよ！ 先生はきつといいお医者さまになってるよ。あたし、ムコウに戻

ったら探しちゃおうかな、先生のこと」

「ええ？」

「堀内医院とか、あるかもしれないじゃない。あ、でもその時先生はもうおじいちゃんだ」

「おじいちゃんかあー。やだな、胡桃ちゃんにそんな姿を見られるのは」

「照れなくていいじゃん！ あたし、絶対探し出すから！ だから先生、あたしのこと、

ずっと忘れないでね。おじちゃんになっても、絶対覚えておいてね」

あたし、先生のシャツを握ったまま、すがるような声で言ったの。

元の世界に戻れるのかわからないけど、でも、先生の記憶の中にはあたしを残しておきたかった。

どんなに時が流れても……どんなに、時代がちがくても、いつか同じ時代でもう一度、会いたいつて思ったんだもん。

先生がどんなしわくちやのおじいちゃんになっても、ね。「忘れないよ。忘れられないよ、こんな不思議なこと。僕の一生の中で胡桃ちゃんのこと
忘れる日はないんじゃないかな」
「先生……」

先生お得意の癒し系スマイルに、あたし、ほっぺたが一瞬きゅってして、体が熱くなるのを感じた。

な……なに、この気持ち。

急に鼓動が早くなって、何気につかんでいた先生のシャツをパツて離すと、なんだか息苦しくなってきたよ。

なな、なんなのよお〜！ 先生の目が見れないよ！

ど、どうしちゃったの、あたし？

「胡桃ちゃん？」

覗き込まれた先生のクリクリの瞳に、どき！

また、胸が跳ね上がった。

「ねえ胡桃ちゃん」

あたしの名前を呼ぶ、その低い声に、どき！

背中が硬直する。

「胡桃ちゃんも、僕のこと、忘れないでな」

照れくさそうに、前髪をかきあげるしぐさに、どきどきして……。

これじゃ、まるであたし……、

(ええ　！)

どうしよう。

先生のすべて、声も目もしぐさも、全部に。

いちいちどきどきしてきた。

いちいち、胸が弾んで、いちいち、体が硬くなるよ。

これって、ヤバイ“合図”だ。

ええ　！　ちよっと待ってよ。ヤバイって。

心の中であたしは懸命に、五秒前に生まれたばかりの気持ちを押さえつけようとしてみ

るけど、意外に手ごわくて、なかなか言うことを聞いてくれない。

(ちよっと……これは、困るよ……)

「約束な」

先生は子供みたいに右手の小指を差し出して言う。

あたし、ぎこちなくならずいて、心臓フル回転状態で、自分の小指をからめた。

ギュって、指きりげんまん。

先生とあたしの、未来の約束。

五十年後のお楽しみ……。

でも、その前に、この今よ！

今、この瞬間の方が大問題！

生まれたての気持ちは、からめた小指のぬくもりと、その優しい眼差しに、

ボン！って、

爆発、しちゃった……。

あたし、時を越えて、

この人に、恋をした。

信じられないかもしれないけど、

十秒前、たった一つの笑顔に、恋をした。

この時代に来てからたくさんのお話をしたはずなのに、
たった一言。

『忘れないよ』

その言葉に、

恋、したんだ……。

あたし、先生が好きだ……。

先生に恋をした。

ヤバイヤバイって思うのに、一緒にいる時間ぶん、気持ち
はどんどん増えていくの。

タイムスリップしたあたし、
交わるはずのなかったこの時代の人に、
恋をし
ちゃった。

「誠、これ、おばさんのお薬」

「あ、ありがと、春代」

「おばさんどう？ また寝込んだんじゃったんでしょ？」

「大丈夫だよ。ちよつと疲れがたまつたみただけど、その分、家のこと胡桃ちゃんが結構がんばってくれてるんだ。ね、胡桃ちゃん」

先生に恋をしたって言っても、もう完全に失恋なんだよね……。

先生と春代さん、お似合いだもん……。

仲良しだし、あたしが割り込むホンのちよつとの隙間すらないってカンジだもんね……。

いつもより輪をかけて二人の仲いい姿が目につく。

春代さんのことも目で追っちゃうし……。

春代さん、本当にキレイな人だよね……。

昔っばい顔立ちはしてるけど、でも、すごい整ってるし、昔の女優さんみたい……。

髪の毛は清潔に肩の上で切りそろえてて、いい具合に癖がついてるのか、なんか白黒映

画時代の、オードリー・ヘップバーンってカンジ？

どおりで、このダサダサのモンペも春代さんが着ると、キマるわけだわ。

ビンテージ版サブリナパンツと命名しよう（何のこっちゃ）

はああああ〜！ どう逆立ちしても、あたしのかなう相手じゃないよね……。

どうせタイムスリップするならハタチになってからがよかったなあ〜。

キレイで清潔で、超お嬢って雰囲気の春代さん。

素朴な先生のことだもん。絶対選ぶのはコッチだよね……。

（はあ……）

「胡桃ちゃん……胡桃ちゃん？」

「へ？」

フと我に戻ると、目の前に先生のアップ。

あたし、椅子からずれ落ちそうになりつつ、
「な、なに？」

「ヤダ！ 裏声になってる！ 恥ずかしいよ。」

「胡桃ちゃん、どうしたの？ さっきからボーっとしちゃって」

「そうよ。お昼ご飯も残してたし、何かあったの？」

「どこかしんどいところもあるんか、胡桃ちゃん」

いつも通り、岡町医院のめっちゃ狭い診察室で、代わる代わるみんなが心配そうに声をかけてくれる。

あたしは慌てて、

「ううん！ 何でもないよ！ 元気だよ！」

「はあ……せつないよ。」

先生の心配そうな顔が胸につまる。

その横にいる春代さんの優しくキレイで大人の顔がちくちく刺さる。

二人はやぱり、お似合いだ……。

あたしが春代さんになんてかなうわけがない。

それに、だいたい、本来あたしはこの時代に存在してない人間なんだし、結ばれるわけがないよね……。

（やっぱりせつないなあ……）

……

「……胡桃、ちゃん？」

「え？」

「僕の話、何も聞いてなかったでしょ」

「先生は思わず苦笑い。」

「あ……ごめんなさい……、なに？」

「ううん、たいした話じゃないけど。それにしてもどうしたの？ 最近の胡桃ちゃん、

変だよ。ボーとしてばかりだし」

夕方の帰り道。

あの夜の空襲がウソのように、海はハチミツ色をして、穏やかに輝いている。

道路の脇にある大きな桜の木の葉っぱが、そよそよ風に揺れた。

先生の大きな目に映るあたし、なんだか冴えない顔、し

てた……。

「もうあれから三週間だもんね……。帰りたい、よね」

「え……」

「ごめんね、胡桃ちゃん。僕なにもしてあげられなくて
(どうして……?)」

先生の気まずそうな表情に、あたしの中の“ストレス”
がうずいた。

どうして、先生は謝るの？

あたしは勝手にこの世界に来た。

そんなあたしに先生は十分すぎるほどの優しさをくれて
るのに。

あたしから不安や涙を取り払ってくれたのに。

どうして、謝るの……？

『帰りたい』なんて、そんなこと決めつけないでよ……。
今うずいて、声になろうとしてる“ストレス”は、タイム
スリップのためじゃない。

この世界への、不満じゃない……。。

「先生のせいじゃないでしょ。先生には関係ないじゃん」

「え？」

「この時代の人ってバカみたいにお人よしなんだから、や
んなっちゃう」

苦々しい笑いが心からこみ上げてきて、思ってもない言
葉があたしの声で発せられる。

先生は怪訝な顔を一瞬した。

先生なんか、傷つけちゃえ！ って、誰かが言う……。。

「タイムスリップなんて現実的じゃないこと、どうにかで
きるわけじゃないじゃん。こんな時

代に。戦争しか能がなくて、兵器ばかり作ってるこの時
代に、どうにかできる方法なん

てあるわけじゃないじゃん」

「胡桃ちゃん……？」

「あたしの時代より、五十年以上何もかも進歩してない時
代なんだよ、ココは。そんな時

代の先生にどにかできるわけじゃないじゃん。パソコンだって
携帯だつてないような、車だつ

て普及してないこんな貧しくて何も無い時代の人に謝られ
たら、こっちが惨めになるよ！」

(あたし、何、八つ当たり、してんの……?)

自分の中の“ストレス”。

先生への想いをどうしていいのかわからない、そんな自分勝手なストレスなんだ。

「胡桃ちゃん……」

先生は、怒るよね。

あたしはこの時代をバカにしたんだもん。

この時代の人を、バカにしたんだもん。

先生はきつと怒って呆れて……あたしを嫌いになる？

保護者よろしく、ずっと側にいてくれたけど、そんなのもイヤになる？

あたしは口をキュッと結んで、うつむいて、先生の下駄をじつと睨んでいた。

「胡桃ちゃん、何か、あった？」

(え……?)

「胡桃ちゃんはそんなこと言う子じゃないよ。何か嫌なことでもあったの？」

(……なに、それ……)

怒るに決まってるって思ってたのに、頭の上から降ってきた言葉は、変わらず温かい先生の優しい言葉……。

「……あたしのことなんか……何も、知らないじゃない……」

「知ってるよ。この時代に来てからの胡桃ちゃんのこと、知ってるよ。こんな時代に来

て不満も不安もたくさんあるはずなのに、いつも笑ってる。

周りに人に心配かけないよう

に平気な顔して周りをなごませてくれる。そういう胡桃ちゃんのこと、僕は毎日見てる

から……」

見上げた先生の顔は、得意気に、なぜか得意気に笑ってた。

夕焼けにキラキラしてる先生の目は、確信の目であたしを見てるの。

(ああ……やっぱり、止まんない……)

好きって気持ち、止められないよ……。

どうしても、止められないよ……。

“お兄ちゃんみたい”、そう思ってた笑顔はもう、“好きな

人”の笑顔に変わってるよ。

春代さんがいるのに……あんなにキレイでしっかりした大人の女なんか、かなうわけがないのに……。

でも、この笑顔がやっぱり、好きだな……。

「……」ごめんな……さい……」

声が震えちゃうのは、半べそかいてるせい。

ホント、あたしどこまでも子供だ。

先生の前だとどんなにがんばっても、子供みたいに甘えちゃう。

春代さんみたいな大人の女の人になりたいのに……。

先生の温かい手がまたふんわり、あたしの頭を撫でる。

先生にとっても、あたしは子供なんだなって感じる……。

いつもなら安心するはずの先生の手、子供扱いされてて悲しくて……やっぱり泣いちゃった。

本当は目の前にある先生の胸に顔をうずめたいけど、でもできないのは……。

これ以上好きになったら、先生を困らせてしまっくんじゃないかって、そう思ったから。

この時代にいるはずのないあたしが、これ以上、先生を巻き込めないから……。

「ごめんなさい……」

「いいよ。謝らないでいいよ。僕は胡桃ちゃんの側にいるから……。胡桃ちゃんの時代の

男よりも頼りないかもしれないけど、でも、僕はいるからね……」

(そんなことないよ……)

先生は頼りなくなんてないよ。

あたしを守ってくれたもん。空襲の夜、あたしを守ってくれたもん……。

時間の中で迷子になってるあたしを、こんなに優しく守ってくれてるもん……！

『早く、帰りたいな……。平成のあの時代に、帰りたい』

あたしはその時、強く強く思ったの……。

不便だから帰りたい、ごはんがまずいから帰りたい。

空襲が、戦争が怖いから帰りたい。

そんな気持ちより、もっと強く……。

これ以上、先生を好きにならないために……。
先生から離れられないって、そう思うより前に……。

先生が、春代さんを選ぶより前に

8

戦争はどんどん激しくなっていてってラジオで言っていた。

お母さんはいつ何が起きてもいいように、庭に掘ってある大きな穴の中に食品を蓄えていた。

でも、この須江島には、あの夜以来何も起きなかった。昭和の戦争時代にタイムスリップしたわりに、あたしは恵まれてるや(??)

戦火を浴びるのは嫌だし、ね……。
でも、

戦火の変わりにせまり来るものが、あたしたちにはあった。

「母さんの具合、あまりよくないんだ」
病弱な先生のお母さん。

最近家でも、起きてるより寝てる方が多いの。
だからあたしも、毎日先生の後ろにくっついて岡町医院に行くのをやめて、家のお仕事を手伝ってるんだ。

このごろ先生、元気がありません……。

先生をちよつとでも励まそうと、お母さんをちよつとでも元氣付けようと、がんばってるつもり、なんだけど……。

ガラガラガシャン！

(あちゃ……。また、やっちゃった)

「胡桃ちゃん？ 大丈夫？」

「あ、平気です！ ごめんね、うるさくしちゃって」
台所から、奥の部屋に向かってあたしは声をかける。
平気……。じゃないんだな、実は。

家の玄関に続いてる、土間の小さな台所。

ムコウの時代でさえ家事なんかやったことないのに、この超がつくほど不便な台所で、あたしは今日も奮闘中。

今は、庭にある井戸からせつかくくんで来たお水を、桶ごとひっくり返しちゃったの。

水道がない！ 炊飯器がない！ レンジがない！ 何にもないっつっつ！

そんな台所なんだから。

ご飯だって火で炊くんだから！ 薪割りから始めるんだから！

ウソみたいな話でしょ？ 初めはもう、意味不明です、お手上げですってカンジで先生にびっくりされちゃった。

先生は相変わらず、「日本は進歩するんだねー」なあって、未来に思いをはせてたけど。

こりゃ、進歩もするでしょ。

ご飯炊くのさえ、超重労働よ！（時給九五〇円ってとこな）

「お母さん、ごはんできたよ〜」

「いつもありがとうね、胡桃ちゃん」

布団からあまり顔色のよくないお母さんは、しんどそうに起き上がる。

「そんなことないよ。いっぱい食べてね」

あーなんかこのシチュエーションって、時代劇の中みただわ。

『いつもすまないねえ』それは言わない約束よ、おつかさん』ってヤツ（笑）

お母さんは、あたしのお母さんよりも、なんとなくはかなげな人だ。

体が弱いせいかもしれないけど……。

でも優しくて温かくて、いつも見守るように微笑んでくれている。

お母さんを見ると、先生がどうしてあんなに真っ直ぐな人が、よくわかる。

「あら、このお味噌汁、おいしい」

「ホント！ やったあ〜！」

「胡桃ちゃん、お料理上手になったわね。今すぐにもお

嫁さんに行けるわよ」

「えっ！」

や、ヤダ……。今、先生の顔、浮かんだ……。

先生と結婚……できたら、あたし……。

「でも、胡桃ちゃんのお婿さんになる人はきつとムコウの時代にいるのよね。早く戻れる

といいわよね」

お母さんは微笑みながらそう言った。

恋は、怖い。

先生と結婚できるなら帰れなくなってもいいって、

あたしは本気で一瞬そう思った。

「そ……そう、だね」

お母さん、ごめんね……。あたし、うそつき。

ムコウの時代に帰れるようになって、お母さん一生懸命お祈りして励ましてくれてるのに、

あたし、帰れなくてもいいだなんて……。

「おばさん！ こんにちは」

「ただいま」

玄関のドアが開くと、春代さんと先生が立ってた。

「あ、お帰りなさい」

いつからだろう……。

お母さんの面倒が見たくて、先生と病院に行かなくなつてから、いつも帰ってくるかと春

代さんも一緒。

あたしの大好きだった夕焼けの帰り道。

今は先生の横に、春代さんがいる。

ちよつとジェラシー気味の、胡桃デス……。

「お、いいにおい。僕も食べていい？」

「あ、うん。支度するね」

「あ、いいわ、胡桃ちゃん。わたしがやるから」

台所に立ちかけたあたしを、春代さんが先に立ち上がった。

「おばさん。今日ね、おはぎ作ったのよ。配給であずきがあつたの。お砂糖は小林さんち

の畑の黒糖いただいたのよ。豪華でしょ」

「まあ、おはぎ！ 春代ちゃん、無理しなくていいのよ」

「そんなこと言わないで。おばさんには早く元気になってもらわなくっちゃ。ね、誠」

「そうだよ、母さん。春代のおはぎ、結構うまいよ。もち米も柔らかく炊いてるし」

「何よ、誠。“結構”ってどっいつの意味かしらっ」

「あ、ごめん。相当、だな」

「よろしい！」

土間の台所で準備をしながら春代さんと、居間では先生とお母さんが笑う。

こういうの、他愛もない会話って言うんだよね……。

なんかあたし、急に浮いてるような、ハブかれたような、変な孤独感が胸につかえた。

あたしがタイムスリップしてくる前。もっとずっと前。

この光景は当たり前前に繰り返されてきたんだなって、あまりに自然に、スムーズに春代さんがこの家の台所に何があるのかわかっている、そんなしぐさを見ていると、そう感じた……。

これが、正しいカタチ、そう感じた……。

当たり前だよ。あたし、本当は存在してないはずのニンゲンだもん……。

「胡桃ちゃん、ご飯上手に炊けるようになったね！」

突然、声高らかに、先生が弾んで言う。

「え？」

見ると、先生ってばお母さんの茶碗のご飯をつまみ食いしてた。

「母さんの好きな柔らかさだよ」

「ええ。本当に、おいしわよ」

お母さんの言葉に、先生も満足気にニッコリ。

胸につかえた孤独感がその笑顔に消えていった。

先生、ちゃんとあたしのことを、気にかけてくれるね……。

前に言ってくれた、

『僕は毎日見てるから』……その言葉通り。

「えへへ、ありがとう」

「ご飯、おいしいって言うてくれて。

それから、ちゃんとあたしに気付いてくれて。

ありがとうね、先生……。

でもあたし、最近気付いてるんだ。

あたしを見てくれる先生を見る、春代さんの目。

とつても悲しそうで、とつてもせつなそうで……泣きそうになって不安抱えた目。

わかるもん、あたし。

春代さんの気持ち、わかるよ……。

きつとあたしがいなきゃ、先生の視線はいつも春代さんだけだったんだよね……。

でも優しくしてお人よしの先生は、迷子のあたしをなだめるようにいつも側にいてくれる。

これにはワケがあるけど、

でもタイムスリップのこと、言っていないから、あたしたちは大学の同級生として、春代

さんの目には映ってるんだもんね。

ごめんね、春代さん。

優しくしてくれる春代さん、あたし大好きだけど……、でも、先生を諦められないんだ。

せめて、好きでいることだけ、許して。

いずれこの世界から消えてしまつまで……、お願いだよ……。

その夜。

春代さんお手製の、あたし的にはあまり甘くないおはぎをみんなで食べて、一家団欒、ほのぼのした後。

お母さんはまた布団へ入って、先生は調べ物があるって、奥の自分の部屋に入ってしまった。

あたしは、台所で春代さんと一緒に後片付け。

台所の二人きりの空気、はつきり言っていて気まずかった……。

春代さんから、嫉妬の気持ちが、ライバルへの対抗心が、あたしの心に流れ込んでいた。

春代さん、あたしが先生を「お兄ちゃん」と思っていないってこと、気付いてるんだ……。

「ねえ、胡桃ちゃん」

（きたー！）

「は、はい？」

洗い終わった食器を拭きながら、目も合わさなくて春代

さんの声質が変わった。

「胡桃ちゃん、誠とは大学でどんな付き合いしてたの？」

「え……。付き合い、っていうか……。別に普通に……。お友達で……」

「そう、なんだ……。友達、なんだ……」

あからさまに、春代さんに安堵の笑みが浮かぶ。

そっか……。春代さんは東京に出てたわけじゃないから、東京の大学に通ってた先生の」

とは知らないんだ……。

一瞬、『恋人同士でした』なんてウソついちゃおうかとも思ったけど、

「そっか……。よかった」

子供みたいに無邪気に笑う春代さんに、そんな意地悪言えない……。

あたしって、小心者。(はあ……)

「あのね、胡桃ちゃん」

今度は真剣な顔で、向きなおしてあたしの目をじっと見つめて。

春代さんは力強く。

「わたし、誠が好き。戦争が終わって、生き残れたら結婚したいと思ってるの」

宣戦布告、先に、言われちゃった……。

しかも、『生き残れたら』だって。その言葉にあたし、“かなわないな”って、痛感した。

命を賭けてるような、そんな告白に、あたしの気持ち、かなわないよ……。

悔しいけど、

せつないけど、

体は震えるけど、

心は泣いてるけど、

それでもあたし。

「うん……。先生もきくと、そう、思ってるよ……」

そんな、引きつったウソ笑いしか、できなかつたんだ……。

あたしも先生が好き、だなんて。

同じ土俵に上がろうだなんて、そんな図々しいこと、できないう……。

春代さんが帰ってからはしばらくして、先生の部屋からまだ明かりが漏れているのに気付いた。

(先生、何調べてるんだろう……)

あたしは、縁側の雨戸を閉めた後で、先生の部屋をのぞいた。

(寝てる……)

四畳ほどの狭い部屋に置かれた小さな木机の上に顔を伏して、先生が寝息を立ててた。

電気はもったいないからか、太いローソクを手元に置いて。

あたしが覗き込むと、先生の周りにはたくさんの本が置かれてた。

そのページの上、無邪気な顔して先生は眠ってた。

『時間論』『空間論』そんなタイトルのついた古びた茶色い本。

これってもしかして、あたしのため……？

(…… 先生……)

胸がキユウって締め付けられた。

『どうにかできるわけがない』なんて言葉を吐いたこともあったのに、それでもこんなふうに調べてくれたの……？

どうしてここまでしてくれるのよ……もお、いいよ……。あたし、なんだか泣きそうになってきたよ。

うれしいんだけど悲しくもあって、なんで涙が出るのか自分の感情が混乱してた。

ねえ、先生……。

あたしがずっとココにいたら、歴史はどうなるんだろう……。

何かが変わるのかな……。

生まれるはずの人が生まれなかったり、起こるはずだった事件が起こらなかったり、そんな“干渉”を与えちゃうかな……。

それとも、こんなちっぽけなあたしは、何も変えることなくこの時代で生きれるかな。

ねえ、先生。

この戦争の真っ只中で、

それでもあたし、ココにいたいって思うんだ。

便利なハイテク機器も、安全な日常も、家族も友達も……、

全部と引き換えに、先生があたしを好きになっ
てくれるなら、なにもいらない。

先生、ごめんね……。

こんなふうに一生涯懸命調べてくれてるのに、あたしの心は全く違うところにある。

この時代から始めて、

あたしの過ごした時代へ向かって生きる、そんな一生を望んじゃってるの。

恋は、怖いな……。

先生の威力はすごいよ。

便利な物が溢れてた時代で、あたしこんな恋したことなかったよ。

全部いららないなんて、考えたこともなかったよ。

こんなにも純粹に人を好きになったこと、なかったよ……。

あたしは先生の肩に薄い布団をかけると、そっとろうそくを消して部屋を出た。

未来への“干渉” は、

この国には何も与えないかもしれない。

だけど、あたしがいたら、春代さんに与えちゃう。

こんなにも先生を好きになっちゃって、あたしは今に自分の気持ちを押さえきれなくなる。

先生に対しても感情をぶつけちゃうかもしれない。

あたしがいなかったらきつと自然に結ばれる二人に、あ

たしは干渉を与えちゃうんだ。

あたしの気持ち、結ばれる瞬間を阻むかもしれない。

そんな怖いこと、できないよ……。

自分の存在が怖くて、はがゆくて、

あたしは月が真上に来る頃

家を出た。

行くアテなんかあるわけがなかった。

だからあたし、初めてこの時代に来た時に倒れてた、あ

の浜へ行った。

ザザン……ザザン……

寄せては返す波の音は、いつの時代も変わらないね。

月明かりしか照明がないのは心細いけど、でもあたしはひざを抱えて、ずっと夜の黒い波を見てた。

あたし、これからどうしよう……。

もう、先生のところには帰りたくないし、かと言って他に行く場所ないし。

こんな狭い島にいたら、結局見つかったらどうだろうし……。

でも、これ以上、先生や春代さんと、顔合わせるの、イヤだ……。

いろんな思いが交錯して、なかなか答えは見つからない。この時代に来てから、一ヶ月。

初めはあんなにイヤだったのに、あんなに怖かったのに、今は全く違うことを悩んでる。

先生のことばかり、考えてる……。

あたし、ホントにお気楽で単純なヤツ。

そんなふうと思ったら、なんだか笑えてきた。

タイムスリップなんて経験しちゃって、普通ならそれだけで、いっぱいいっぱいのはず

なのに、恋のおまけまでつけちゃって……。

今じゃ、この時代がどーのより、自分の恋の行方ばかり考えちゃって……バカみたい。

こんな想い、かなうわけじゃない……。

あたしが生まれるのはこの先、四十年以上も後のことなのに。

そうよ、あたしはまだ存在すらしてないのよ。

そんなあたしがここで恋をしちゃうなんて……バカらしい時間のいたずら。

恋なんか迷惑されちゃダメだよ、胡桃。

あたし、帰らなきゃ……。

無意識に、立ち上がると、あたしは夜の海へ向かって歩き出した。

足元に波が寄せてくる。

もう秋の気配が近づいてるせいか、水は少し冷たく感じ

たけど、そんな感覚すぐになくなるはずだよ。

あたしは、海の向こう、波の果てに何かを見つけたようにそこだけをじつと見つめて一歩一歩海の中へ入っていった。

そうよ。

あたしはこの時代の人間じゃない。ちゃんと自分の時代に戻らなくっちゃ。

スクラップ工場の爆発がタイムスリップの原因なら、また同じ事をしたら戻れるかもしれない。

あの時あたし、薄れる意識の中で、死ぬんじゃないかって思った。

だからもう一度、死ぬんじゃないかって思うようなことを起こせば、戻れるかもしれないよ。

戻ろう……。

それが一番いい方法だよ。

元の時代に戻れば、先生と顔を合わせること、先生と春代さんが結ばれる時も、何も見ないで何も知らないでいられる。

あたし、傷つきたくないもん……だから逃げる。

何よ……なんか文句ある！ 負け犬だって言いたきゃ言えば！

あたしは……あたしはそんなに強くないんだから。

お気楽で単純だけど、だからって大好きな人が他の女とくつつくところなんか見たくないもん！

あたしはただ戻るだけよ……。

あの便利で何でも揃ってる、物の溢れる 新世紀の日本へ。

おしゃれしか興味なくて、カラオケが遊びで、そうそう、楽しみにしてたライブもあるんだっけ。

勉強は嫌いだけど、でも平和で安全で、友達がいて家族がいる、あたしの場所。

帰ったら思いっきりショップで買い物してやる！ ライブで弾けてやる！

こんなところ……、

こんな何にもない時代のことなんか……

忘れてやるんだから！

何、泣いてんのよ、あたし！

バカ！ 泣く理由なんかないじゃん！

あたしは帰るんだから……帰るんだから……！

(キャ！……)

急に足がつかなくなつて、あたしはバランスを崩すと、海の中に頭まで浸かつた。

塩辛い水が喉に流れ込んで、水の中でむせると、あたしは我に返つたようにあがきだした。

息が吸いたい！ って思つても、体が思うように上がつてくれなくて、水面から顔を出せない。

どうしよう……！ どうしよう！ どうしようっ！

このままじゃマジでヤバイよ！ ホントに死んじゃう！ ばしゃばしゃ手で掻いてみるけど、混乱してるせいか、まるつきり無駄な抵抗。

泳ぎはそんなに苦手じゃないはずなのに、どんどん体が沈んでいっちゃう。

(助けて！)

ヤダよ！ 死んじゃうのはヤダよ！

苦しいよ！ 息できないよ！

誰か来て！

誰か、来て！

(先生 助けて！)

忘れてやるって思つてるのに、

緊迫した状態で思い出したのは、先生の顔だった。

優しくて穏やかで、きれいな瞳を持つてる、あたしの

大好きな人。

ムコウの世界に帰りたいだなんて。

本当は強がりなの。

本当は、どこの世界もどこの時代も、そんなのどーでもいいの。

先生の側がいい。

先生の側にいらればどこでもいい。

先生の声が聞こえるところ。

先生の笑顔が見えるところ。

そこが一番いいの

！

.....

「胡桃ちゃん！」

これって夢？

うつすらまぶたを開けたら、先生の顔があるよ……。

これって、幻？

あたしの願いがそのままかなってる……。

どこ……どこ……？

「胡桃ちゃん！ しっかりして！ 胡桃ちゃん！」

先生の低い声が必死にあたしの意識を呼び寄せる。

あたしはその声に導かれて、

「……せんせ……」

「大丈夫！？ 胡桃ちゃん！？」

先生の困惑した顔が三十センチのところにあつた。

どうしたんだろう……先生、髪の毛濡れてるよ……。

あたしのほっぺに、先生の前髪のしずくが落ちてくるの。

しずくはどうしてか、温かくて、あたしの冷たくなった

体を包んでくれるみたい。

あたしは先生に支えられながら、ゆっくり起き上がると。

ザザン……ザザン……っていう波の音に、自分が何をし

ようとしてたか思い出した。

「先生……どうしてここに……」

「バカヤローッ！！」

「え？」

怒鳴り声 先生の、声？

あたし、ポカンとしちゃった。

でも、先生は顔を真っ赤にして、声を荒立てて。

「何やってんだよ！ こんな夜中に一人で海に入って！

危ないだろッ！」

「せ……せんせ……」

「家にいないから心配して探してみたら海でおぼれてる

し……何考えてんだよ……！」

「それは……あの……」

あたしが口ごもると、先生はだんだんいつもの先生に

戻って。

あたしの濡れてるほっぺや手を、ごしごしこすってくれ

た。

「寒くない？ 大丈夫？」

自分だっぴつしより濡れてるくせに……なんで……？

どうして先生はこう、お人よしなんだろう……。

どうして先生はあたしなんかのことを、心配してくれるんだろう……。

どうしてあたし、また……。

「胡桃ちゃん？ 寒いのか？ 怖かった？」

さっきの怒鳴り声が別人みたいに優しい声であたしの顔を覗き込む。

その先生の顔、ぼやけてはつきり見えなかった。

またあたし、泣き出しちゃって……、

それでそのまま先生の胸の中に飛び込んだの。

「胡桃ちゃん……？」

呼ばないでよ……そんな声で呼ばないでよ……。

優しくしないで。側に来ないで……。

先生をぎゅって抱きしめながら、思いは矛盾してる。

矛盾した気持ちがちやごちゃして、自分じゃ抱えきれなくて、それで泣いている。

先生にしがみついて泣きながら。

またこうして会えてうれしくて思うの……。

先生がいる時代にいられて、よかったって思うの。

元の時代に帰りたくて海に入ったのに……それでも先生の時代から消えなくてよかった

って……思うの。

先生を好きって気持ち、消えない……。

あたし、先生が好きだよ……イヤンなるくらい、これだけハッキリしてる。

もう、止まんないよ！

「胡桃ちゃん？ どうした？」

先生が好きって、一瞬間おつかと思った。

でもどうしても、最後の一步を踏み出す勇気が出ない。

未来への干渉が怖くて、どうしてもできなかった……。

「せんせ……あたし……ここにいても……いい？ ずっと、……いてもいい？」

これが精一杯の告白。

今のあたしにはここまでしか言えないよ……。

ねえ、先生。

先生の側にいることは辛いこといっぱいだってわかってるんだよ。

見たくないもの、いっぱい見ちゃうってのもわかっ
んだ。

でもね……それでも一緒がいい。

先生と離れる方がよっぽど辛いつてわかったもん。

だから……。

「いいよ。ずっと、ここにいなよ」

「先生……」

先生の濡れた目は優しく月明かりに反射してた。

あたしを真っ直ぐに見つめて、微笑みながらも一度。

「いいよ」

……つて。

あたし、自然と微笑んでた。

先生のこと見つめて、微笑んでた。

もうこれだけで満足だ。

先生の側にいられるだけで幸せなんだ。

先生の笑顔はあたしにそんな気持ちくれた。

体中に幸せって言葉が溢れて、冷たかった体がぼかぼか
してくるの。

「何笑ってんの」

「なんでもないよーだ」

そう言つて、また先生にしがみつく。

春代さん、ゴメンナサイ。

今だけだから。ちよっとだけだから。

今だけ、先生の温かさ、独り占めさせてね。

先生も呆れ顔で笑ってるけど、でもいいや。

今だけ、甘えさせて。

ちよっとだけ、このままできて。

ねえ、先生……。

前に先生言つてたよね。

あたしが過去へ来たのには何かワケがあるんじゃない
かって、言つたよね。

きつと、神様がくれたタイムスリップの運命は、こうだっ

たんじゃないかな。

先生に恋をするため

物に溢れたあの時代じゃできなかった、純粋な恋をする

ためじゃないかな？

調子いいかもしれないけど、あたし、そう思いたいよ。

あたしが過去へ来たのは、
堀内誠に出会うためだった……って。

今だけ、そう思っていていいよね……？
今だけ、そう思わせてね……。

10

携帯電話やEメール。

当たり前のように毎日誰かと通信してた。

他愛もないコミュニケーション。

口では言えないこと、面と向かっては言い出しにくいこと、メールにしたらちゃんと言えたこともある。

でも、今いるこの時代にはそんな便利な通信システムはなくて、どんな言葉も、伝えたい人の目を見て、自分の声で伝えなきゃ、伝わらない。

メールも大好きだったけど、あたし、こうして目を見て話すことで、メールの何倍も自分の気持ちを伝えられることに最近気付いたんだ。

自分の気持ちだけじゃないよ。相手の気持ちも、あたしの心に伝わってくる。

何気ない「おはよう」も、さりげない「ありがとう」も、そこに笑顔が加わるだけで、何倍も広がった言葉になる。そうやって言葉を交わせば交わすだけ、相手を大事に思っただけ、それで、毎日好きって気持ちが増えていくの。

あたしにとつての不便は、時としてとっても大事なことを教えてくれるだって、ちょっとぴり皮肉なカンジもするけど。

あれからあたし、先生への気持ちちゃんと整理したんだよ。

『ずっとここになよ』

……って、あたしには、その言葉だけで十分だから。

だから、春代さんと先生と一緒にいるところも少し冷静な目で見られるようになったんだ。

春代さんの未来に干渉しないように、それでも自分の気持ちにウソをつかないように。

先生が好きって気持ちはあたしだけが知ってる大事な想い。

誰に言わなくても、あたしだけが知ってればいいの。
先生は真っ直ぐな目であたしを見ていろんな話をしてく
れる。

それだけで、あたしは大丈夫だから。

でも。

そんな穏やかな日は続くわけもなかった。

昭和十九年、秋。

先生に、召集令状が 届いたんだ……。

「眠れないの？ 先生」

召集令状を受け取ったその夜。

縁側に座って空に浮かぶ月を見ていた先生に、あたしは
そつと声をかけた。

このシチュエーションって、ちょうどあたしがこっちの
時代に来た日に似てる……。

「隣、座ってもいい？」

遠慮がちに言っていると、先生はニッコリ笑って隣をゆずって
くれた。

二人でお月見しながら、あたし、なんて言ったらいいの
かわからなかった。

召集命令

先生は、戦争に行く……。

歴史は変えられないのかな……あたしの力で変えること
できないのかな……。

もしも今、天皇陛下に会えるのなら、会って言いたいよ。

「日本はこの戦争には勝てません。もう中止してください
」って……。

そんなの無理だってわかってる。

でも、先生に何も言えない自分がかゆくて、辛い……。

「……胡桃ちゃん」

「は……はい？」

「僕がいなくなったら、母さんのこと頼めるかな？」

先生は気まずそうに言っつ。

「うん！ 大丈夫！ あたしに任せといてよ。うん……大
丈夫……」

本当は 不安。

あたし一人でお母さんのお世話できるのか、わかんない。つていうか、先生がいなくなって、この時代で生活していけるのか不安なんだ。

でも、あたしがそんな顔したら先生、心配になっちゃうよね……。

絶対悟られないようにしなくっちゃ。

無理矢理でもいいから笑ってよう……。

「ありがとう、胡桃ちゃん」

先生、心もち元気ない？

やっぱり……戦争になんか行きたくないの……？

当たり前だよね……誰が好きこのんで死に急ぐのよ……。

「先生……」

「ん？」

「あの……あたしにできること、何かない？ 何でも言って。先生が行く前に何でもするから」

あたしは白銀の光の下で、じっと先生の黒目勝ちの目を見つめて言った。

先生の役に立てることがあれば何でもしたい。

損得ナシに誰かのために何かしたいってこんなに強く思ったの、初めてだな……。

先生はきょとんとしてたけど、そのうち笑って。

「ありがとう」

……って、あたしの頭を撫でた。

それでね、先生は初めて、あたしがここへ来てから初めて、あたしに甘えてくれたの。

先生のお願いは。

「じゃ、明日一日、僕に付き合って……だった。」

11

「先生、どこまで行くの？」

「もうちょっと。疲れた？」

「ううん、大丈夫だよ！」

次の日。

あたしたちが一緒に出かけたと言って言ったら、お母さんは快くOKしてくれたし、体調もよさそうだったから、あたしと先生は安心して家を出た。ちなみに病院は休診日だし、今日は丸一日先生と一緒に

いられる。

つまりこれって、初デート！ ってヤツ？（キヤー！）

先生は島の中心にある森の中へ入って行ったの。

森は大きな木が生い茂っててちよっと暗かったけど、先生は止まることなくどんどん奥を目指して歩く。

一体どこまで行くんだろう……。。

初デートは海の方がよかったんだけど……。でも、先生がどうしても行きたいところがあ
るって言うからね。

獣道みたいな舗装もされていない山道を、先生の後ろについて歩いていく。

「ここ、危ないから気をつけて」

シダやマツに覆い尽くされて道も見えないところ。

先生が当たり前みたいに、あたしの手を握った。

湿気が多くて暗くて、なんとなく怖かったけど、先生の手、これだけであたしの心は光
よりもっと強力なアイテムを手に入れた気分。

先生の温度は、何よりもあたしを安心させてくれる。

手が温かい人は心が冷たいっていうけど、そんなのはウソ。

先生の温かさは、先生の心の温度そのものだよ。
温かくてあたしを安心させてくれるもん。

どのくらい奥へ入ってきただろう。

「この奥だよ！」

先生の声が高らかに弾んだと思ったとたん。

先生がからまるシダを取り払ったとたん。

一瞬目を細める程の光が差し込んで、目の前が真っ白になっただけど、そのうち視界がな
れてきたら。。。

「うわ……!!」

あたし、小さく悲鳴あげちゃった。

だってそこは。

真っ赤に燃える紅葉と、

透き通る水のせせらぎ。

小川が流れてて、そこにだけまるでスポットライトみたいに太陽の光りが降り注いでる。
とにかく、すごいキレイッ！

「すごい！ 紅葉だあ！」
赤、オレンジ、黄色、もみじや楓の三色のコントラストが絶妙！

真っ赤のじゅうたんみたいに敷き詰められた落ち葉は踏んでみたらサクサクいってた。

透き通る小川の水はよく見るとそこから湧き出てるの。湧き水なんて、あたし初めて見た！

思わず手を入れてみると、体中に冷たさが走った。

「先生！ すごい！ 水、冷たいよ！」

なあんで、すっかりここまでの疲れも忘れて大はしゃぎ。テーマは秋ってカンジの世界に、大大感動！

先生はニコニコしながら小川の水を手ですくうとごくごく飲む。

「飲めるの？ お水」

「うん。うまいよ」

川のお水なんて初めてだから、恐る恐るすくって、口をつける。

うわ！ なにこれ！

「スゴイ！ おいしー！」

「ね。井戸水よりもつとうまいだろ」

先生の家の井戸のお水も澄んでておいしかったけど、こっちはもつと澄んだ味。

自然と太陽のスパイスがよく効いてる！

それからあたしたち。

早起きして作った、胡桃特製の特大おにぎりを食べて、小川で水遊び。

なんだかいつも以上にはしゃいじゃった。

先生もいつもより子供っぽかった気がする。

森にはあたしたちの声と、鳥の鳴き声、後は時折風が葉っぱを揺らす音が響くくらいで、

あたし錯覚しそうだった。

まるで、この世界にはあたしと先生しかいないんじゃないかって……。

戦争もない。

恋のライバルもない。

時代も時間もなんにもない。
ただ、先生がいてあたしがいる、世界。
そんなんだったらどんなにいいだろう……。
ずっとずっと、この今が続いたらどんなにいいだろ
う……。

ねえ、先生……。

この“今”は幻なんかじゃないよね。

あたしたち、一緒だったよね。

先生の笑顔も、先生の声も、

幻なんかじゃないよね……。

あたしたちはたしかに、同じ時代の同じ時間を共有して
た。

それが事実であるように、あたしはずっと祈ってた
よ……。

それで、それが現実だって信じたくて、先生の手をたま
に握った。

確かめたかったんだ……先生の、温度。

先生の温かさに、今この“時”を、確かめてたんだ
。

そのうち、青かった空の色が、この紅葉と同化する頃。

帰りたくないってあたしの気持ち、天に通じたかのよう
に雨が降り出した。

夕焼けに染まっていた空は、たちまち西からやって来た黒
い雲に覆われて、降り注いでい

た太陽の光は雨粒に変わった。

「胡桃ちゃん、こっち！」

この辺を熟知しているのか、先生は迷いもしないで雨宿
りの場所に連れて来てくれた。

「止むまで、ここにしようか」

「うん」

そこは、小さなほら穴。

二人並んだら満員の狭さだったけど、雨をしのぐのには
ちょうどよかった。

もみじの葉っぱが雨に打たれるのを、あたしたちはそこ
に座ってじっと見ていた。

「胡桃ちゃん、寒くない？」

「うん。平気だよ」

シャツも髪も少し濡れちゃったけど、先生の肩が触れるおかげで、あたしは寒さより、緊張してる。

夕暮れのこの雨はあたしの願いだね……。

先生ともっと一緒にいたいって、日が傾き始めてからずっと思ってたもん。

こんな近づきすぎで緊張するけど、でも、安らいでもいる。

先生の温度、独り占めできて、幸せだな……。

ずっとこうしていられば、いいのに……。

フト、あたしの中であたしが言った。

それは思っちゃいけないことなのに……。

このデートは最初で最後。

そのこと、あたしちゃんとわかってたのに……。

先生は戦争へ行く。

考えたくもない現実。

「行かないで」って言葉は絶対に口に出しちゃいけないタブー。

わかってるの……わかってる……。

今日一日、何も考えずに、ずっと笑って過ごそうって決めてたのに……、

強くなる雨音に心の奥に隠したはずの気持ちが戻ってきてちゃう。

それをまた心の奥につっこもうとしてるんだけど。

「この場所、僕だけの秘密の場所だったんだよ。でも、この島で一番紅葉がきれいなとこ」

だから、胡桃ちゃんに見せたかったんだ」

なんて、先生がフイにそんなことポツンと言っただけ……。だからあたし……。

必死で隠そうとしてる気持ちが溢れ出しちゃうよ……。

「……先生……」

あたし、泣き出しそうな体を抱きしめるようにひざを抱えて、震える声で言ったの。

「先生……あたし……先生がこの島からいなくなっちゃったら、どうしていいかわかんないよ……」

「え？」

「先生がいなかったら……この時代でどうしていったらいいの……わかんないよ……」

「胡桃ちゃん……」

「やっぱりダメだ……」

ガマンなんてあたしにはできないよ……」

自分の気持ちに嘘ついてかきかけて、ごまかして笑うなんて器用なこと、

あたしにはできないよ。

あたしは単純な性格だもん。

こんなに心が泣いてたら、笑うことなんか、やっぱりできないよ……！

先生は困るよね……あたしが言ったら困る。

もう、困った顔してるもん……」

でもあたし。

「行かないで……」

……って、言わずにいらなかったの……」

先生の目を真っ直ぐに見上げて見つめて。

「戦争になんか、行かないで」

……って。

この時代に来て、あたしがここまで生活できたのは、先生がいたからだよ。

先生があたしの側にいてくれたから……」

先生と出会って、先生と生活できたから……」

そして、

先生を好きになったから

「……胡桃ちゃん……」

「無理だっけわかってる。先生が困るのもわかってる。でも……でもあたし、こんなきれいな紅葉、また見たいもん。こんなきれいなとこ、また来たいもん……。あたし、先生と

一緒にいたいよ……」

もう、気持ちを隠すべなんかない。

行かないでって気持ちばかりが先行して、先生をどうやったら引き止められるのか、先

生とどうやったら離れずにいられるのか、そんな線を見つ

けたくてあたしはそのための言葉を探してた。

先生は困った表情で、辛そうだった。

こんなあたしの言葉、本当は聞きたくなかったんだと思う。

でも、もう遅い。

あたしは心のかぎを、そう気付くより一瞬早く、

開けてしまったから……。

「あたし、先生が好きだから……離れたくない……!」

先生の困った顔は、見たくなかった。

だからあたし、先生に抱きついて、その胸に顔をうずめた。

泣いちゃダメって必死にこらえたけど……でも、

フワって……先生があたしを抱きしめてくれたから……だから……。

涙が後から後から溢れてきて止まらなくなった……。

両音が響きわたる、湿気の強いほら穴。

あたしは先生がどこにも行かないように、強く抱きしめてた。

お願い、神様。

先生を戦争に行かせないで。

今すぐ戦争を終わらせてください。

あたし、何にもいらないよ。

あんな情報化の時代も、あんな豊かな時代も、何もいらない。

狭い国土だって、文句ないよ。

ただ……。

ただ隣に先生がいる世界があればそれだけで何もいらない。

だから争いを鎮めてください。

こんな戦争、終わらせてください。

こんなの、悲しすぎるよ……。

映画よりテレビより現実はまだ悲しすぎるよ!

一体誰のために先生の手を離さなきゃならないの？

一体何のために先生の手を奪われなきゃいけないの？

学校の先生はそんな話してくれなかった。

あたしは戦争について何も知らない。

一体誰のために、

一体何のために、

大好きな人と、離れなきゃならないのか、そのワケを……。

歴史は苦手、年代なんか覚えられない。

そう思ってた過去の歴史。

あたしには関係のない世界だって決め付けてたけど……

そんなの間違えだ。

関係なくなんてない。

あたしは、こっぴつたくさんの別れやたくさんの涙が

あつて、生まれただ。

あの豊かな時代は、こんな悲しい歴史を経てやってきたんだ。

あたしがあの時代で笑っていられたのは……こんなに悲しい涙を流した人がこの時代に

たくさんいたからなんだ……。

大きな犠牲の上にあった“平和”だったんだね……。

自分が壊れちゃうんじゃないかって思った。

泣いて泣いて、

このリアルな自分の涙に現実を感じてまた泣いて。

先生を止めたかったけど、そんなのは無理で。

誰かが決めた法律にあたしなんかかなうわけもなかった。

先生はあたしの告白に何も言わなかった。

受け入れるわけでもフルわけでもなく、中途半端な言葉もない。

抱きしめてくれた意味は、わからないまま……。

先生は　　、戦争に行った。

横浜の海軍基地に出征の日。

あたしは島の港へは行かなかった……行けなかったの。

テレビで見たことのある茶色の軍服にブーツと帽子。

先生の枕もとに用意されたものを見てたらたまらない気持ちになって、朝のうちに家を出てきちゃったんだ。

あたし、一人、森に来たの。

あの日の紅葉はもう半分以上散ってしまってたけど、変わらずきれいな小川の側で、ぼつんとその時を過ごしてた。

先生、行っちゃったね……。

もう、会えないのかな……。

先生、気付いたかな。

あたしのプレゼント。

居間のちゃぶ台の上に置いた、胡桃特製の特大おにぎり。それから……。

あたしがこの時代に来た時に身につけてた、指輪。
あげるものなんか何にもないけど、シルバーのシンプルな指輪に、思いをたくさん込めたの。

神様どうか、

この人を死なせないで……

って。

未来の時代であたしがつけてたもの。

未来の時代に先生を導いて欲しくて……。

先生の命を、つないで欲しくて。

先生に、あたしを覚えていて欲しくて

……。

「どうして来なかったの？」

その夜の先生の家の縁側。

この前まで先生がいたそこに、今夜は春代さんが座つた。

お母さんが心配だからって、今夜は泊まるらしい。

夕方になってフラフラ帰ってきたあたしにみんなは何も言わなかったけど、夜になって

縁側でお月見していたあたしに、春代さんが聞いた。

「……………」

「誠、心配してたわよ。胡桃ちゃんのこと」

「…………ごめんなさい」

「別に、悪いって言ってるんじゃないのよ。ただ…………どうしてかなって…………」

春代さんはなだめるように言う。

その声はいつもよりなんとなく優しい気がするのは、気のせいかな？

あたしがあまりにしょんぼりしてるから、かな…………？

もうバシたよね、あたしの気持ち。

あたしがどこに行つてたのかみんなが聞かなかったのも、多分みんなあたしの気持ちに

気付いたからだと思う。

あたしが先生のこと、好きだって…………。

うつむいて何も言わないあたしに、春代さんは一つ溜息をつくと、思い切つたように。

「胡桃ちゃん、あたしね、告白したわ」

「え！」

思わずあたし、顔上げちゃったよ。

素直すぎるあたしの反応に、春代さんはニッコって笑つと。

「胡桃ちゃんも誠のこと、好きなのね」

って、疑問形じゃなく言われた。

春代さんの告白が気になりつつ、あたしは覚悟を決めて、うなずいたんだ。

もうごまかしてもしようがないもん。

結局自分の気持ち隠しとおせなかった…………。

でも、春代さんはそんなあたしを怪訝の目で見るわけでもなく、微笑を保つたまま。

「胡桃ちゃんは、告白したの？」

「……………」

コクン、ってあたし、うなずいて。

「でも、何も、言ってもらえなかった……」

「そう……。わたしは、『ごめん』って……」

「え？」

向きなおすと、春代さん、

恥ずかしそうな笑顔で。

「わたしには、ごめんって言ったわよ、誠」

(え……)

返事、春代さんにはしたんだ……。

『ごめん』ってつまり、NO　だよね……。

信じられない……春代さんと先生、結ばれなかったんだ……。

「何も言わないってことが、胡桃ちゃんへの返事なのね」

「え……？」

「何も言わない……つまり、何も言えなかったのよ……。

戦争に行く自分からは、何も言

えなかったのよ」

「それって……？」

「誠は……、胡桃ちゃんが好きだった、ってことよ。

好きだから何も言えなかった

のよ……。誠は、優しい人だから……」

「……！」

行き場のなかったあたしの想い。

春代さんの言葉でようやくだどりつけた気がした。

でも、たどりついたそこは、もっと悲しい場所だったように思える。

NOよりも、むしろはっきりしたYESよりも……もっと

と悲しい答えだった……。

縁側に差し込む月の光は変わらずに輝いているけど、

あたしには悲しい色に見えた。

「泣かないで……胡桃ちゃん……」

春代さんがあたしの肩を抱いて、背中を優しくさすってくれた。

そんなぬくもりは先生の温度を思い出させる。

先生じゃないぬくもりは、先生を思い出させて涙が止まらない。

心が通じたのに、

心は失恋したより辛い。
辛くて辛くて、
今すぐ先生に会いたい！
先生の手を握りたい。
先生笑顔が見たいよ。

どんなに泣いたってかなわない願いなのに、わかってても祈る気持ちが尽きないよ。

お母さんに聞こえちゃったら心配かけちゃうのに、あたし、声を上げて泣いた。

春代さんに抱えてもらいながら、
先生のことを呼んでた。

届くはずもないのに、わかっているのに、

目の前に積み上げられた先生と過ごしてきた時間を取り戻したくて、せつない気持ちを

抱えきれなくて、そんなどうしようもないくらいの想いは涙に変わって、あたしの中から耐えることなく流れ出た……。

それでね……。

月の光が消えて、明け方の近づいて来た頃。

あたしはフイに、自分のことを話し始めたんだ。

春代さんに、

あたしが未来人だって……話したの。

どうして話す気になったのかわからないけど、でも、春代さんには知っていて欲しいって思ったの。

春代さんが正直に自分の気持ちさらしてくれていたのに、あたしは隠してばかりいたからかな。

今さらだけど、あたし、自分の中に隠し事しておきたくなかつたんだ。

春代さんとは、ちゃんと向き合いたって思ったの。

春代さんは驚いてたけど、でもやがて全部を納得した上でこう言った。

「わたしの未来は、きつと何も変わらないわ。胡桃ちゃんがいないくたつてきつと誠とは結

ばれなかつたと思うし。胡桃ちゃんは誠と出会つたために過

去に来たのね。きっと神様は初めからそう決めていたのよ。わたし、誠の相手が胡桃ちゃんでもよかったって思うの。どうしてかはわからないけど……初めてあなたを見た時から、なんとなくこうなるんじゃないかって思ってた。不安だったけど、でも、誠にごめんって言われた時も、やっぱりなって、なんだか納得しちゃったの。変だけどね……」

そう笑った春代さんの笑顔。
見慣れたいつもの笑顔だったのに、
どうしてだろう……。
あたし、どうしてか、なつかしいって……感じたの。
頭の奥で、何かが反応するような、
どうしようもなく、なつかしい……って。
不思議な感覚だった。

その朝の春代さんの笑顔。
あたし、一生忘れないよ……。
優しく降り注ぐ朝日みたいに輝いてた笑顔。
あたし、一生忘れない。

それからしばらくして。
春代さんと岡町のおじさんは横浜へ行った。
おじさんは陸軍の医療班に入るために。
春代さんは同じ場所の看護班に入るために。
二人とも、戦争へ行ったんだ……。
この島の若い人のほとんどが戦争へ行ってしまった。
島はなんだかとてもひっそりとして、あんなに騒がしかった正太たち悪ガキさえも、今は静かに暮らしていた。

ねえ、先生……。
あたしはお母さんが眠っている時、よく一人で海に行くんだよ。
潮の香りは先生を思い出すんだ。
波の音は先生の声を思い出すんだ。
もう、島の風は冷たくなったよ。

この島の冬はどんななんだろう……。
あたしは一人で大丈夫なのかな……。
今のところ、お母さんのお世話は問題なしだよ。
ご飯もしっかりやってるし、洗濯も上手に洗濯板で洗えるようになったよ。
お母さんは……ちょっと元気がないけど……。
でも、一日一回は笑ってくれるよ。

ねえ、先生……。
先生は、元気ですか？
海軍の航空部隊って聞いたけど、飛行機に乗るのかな。
訓練、がんばってますか？

この海の間ごろで、
きつとがんばっているんだろうね……。
あの日、帰ったらちゃぶ台に置いた指輪がなくなってたけど、持っていてくれるの？
そうならいいな……。

ねえ、先生。
もう一度、会えたらいいね。
戦争に行った人を待つてはいけないよって、隣の家のおばちゃんに言われたんだ。
待つてる人の存在は、軍へ行った時に力が出し切れないから……。
でもあたしは、信じてる。
きっとどこかでもう一度会えるって。

だからあたしは、まだこの時代にいるんだ。
あたしが未来へ帰るにはまだ何か足りないって思うの……。

ねえ 先生……。
もう一度あたしたち、
会えるよ、ね……。

13

カタカタカタ……

(風……?)

あたし、一度寝たら相当の音がなきゃ起きない夕子なの

に、どうしてその音に気付いたのかはよくわからない。

そんなに大きな音じゃなかったけど、玄関の扉が揺れるような音がしたの。

昔の家は立て付けが悪いせいか、ちょっとした風でもあつちがカタカタ、こつちがミシミシってよく鳴る。

玄関の引き戸には曇りガラスがはまっているからか、特によくカタカタいつてるの。

あたし、なんとなく気になったから、隣のお母さんを起こさないように気をつけて、部屋を出たの。

ふすまを開けると、土間も、玄関の扉も今はシンとしてる。

でもなんだろう…胸騒ぎがする。

そう思ったら気になっちゃって、あたしは玄関の戸をそつと開けた。

(……………)

外はいつもと変わらない。

向かいの家の壁が見えるだけ。

冬に近づくことを知らせるような冷たい風が道に吹き抜けていくと、

あたしは、なんとなく…ただ、なんとなく。

一歩道に踏み出たんだ。

なんとなくね、風に乗って呼ばれたような気が、したから……。

「！」

ウソ！　なんで!?

どうして？　こんなこと、あるの!?

風が吹きぬけた暗い夜道。

一本しかない丸電球の外灯の下、

茶色い皮のブルゾンの背中が目に飛び込んでくると、

あたし心臓が絞られたように、息が止まった。

信じられない……。

まさか？って思う。

でも、震える声はなかなかその背中に届かない。

あまりにも驚いて、声が出なかったんだもん。

だって、こんなこと……

ウソみたいで、信じられなくて……。

夢でも見てるのかと思った。

でも、そんなふうには立ちすくんでるあたしに気付きもし

ないで、その背中は街頭の下を

通り過ぎて、どんだん向こうへ行ってしまっから……。

あたし、

もう一歩、踏み出して

「……せんせ……………」

って、

やっとの思いで、風の音のような小さな声を出したの。

皮のブーツを履いた静かな足音は、あたしの声に一瞬肩を震わせて止まった。

やだ……振り返る……。

どうしよう……あたし今、どんな顔してるの……？

すごい驚いて硬直しちゃってる。

ほっぺたも寒さで固まっちゃったみたいだし、笑おうと

思っても顔が動かないよ。

暗闇の道。

呼ばれた気がしたんじゃない……。

あたし、この人の小さな声を、無意識に拾ってたんだ……。

振り返った彼も、そこに立つあたしを見て、驚いたように息を止めた。

時間が一瞬、止まった……。

「先生ッ！」

「胡桃ちゃん！」

弾かれたようにあたし、もつれそうになる足でその影を

目指して走ったんだ。

鈍い色をした外灯の下、

あたしは、先生のブルゾンに飛び込んだの。

ウソみたい。

信じられない！ でも幻じゃない！
体が覚えているの。先生の温度。

夢じゃない！
幻じゃない！

たしかに、先生だッ！

「胡桃ちゃん……！ 信じられないな……。絶対に気付かないって思ったのに……」

「先生……。先生！」

神様の起こしてくれた、奇跡

この夜のことを、

先生は後でそう呼んでた……。

本当に奇跡だよ。

先生が呼んだ小さな声。

あたしが目を覚ましたのは、先生の声だったんだ……。

「胡桃……」

って、あたしを呼んだ、先生の声。

それからあたしたち。

家に入るのを先生が拒んだから、二人で海へ行つたの。

浜辺は寒かったから、漁師さんが道具を置いてある浜辺に立てられた小さな小屋に内緒で入っちゃったんだ。

「……ロウソクがあつてよかった」

網や竿が所狭しと置かれてる小屋の中は狭かったけど、明かりをつけるとあたしたち、

小屋の隅に寄りかかって話し出したの。

「軍の上の人がちよつと厄介な病気にかかつて……僕、医学の知識があるからみせてもら

つただけど、島にある薬草が一番利くつて話したら取りに行くことを言われてさ……」

「そうだったの……。こんな夜に？」

「夕方に着いて薬草取つて……明日朝一番に船が来るから、それで横浜に戻るよ」

「そっか……」

やつぱり、帰っちゃうんだ……。
当たり前だけど、やつぱりあたし、しゅんとしちゃう。
そんなあたしを見て、先生はまた、前にしてくれたのと
同じように頭を撫でてくれた。
……。なつかしい。
先生の大きくて温かい手。
なんでかな、涙、出そう……。
いとおしくて、なんだか、涙出そうだよ……。

「家に帰って母さんに会ったら、なんだか軍にいるみんな
に悪い気がしてさ……。ごめんね、
こんなとこまで連れて来ちゃって」
「ううん！ そんなことないよ。先生と会えたんだもん。
どこだっていい！」
「うん」

ゆらゆら揺れるロウソクの炎の中、先生がニッコリ微笑
む。

(ああ……。やつぱりな……)

先生の笑顔、
やつぱり安心する。

あたしの心に安堵感が広がる。

それを見たら、やつぱりあたし、先生が好きなんだなっ
て改めて思っちゃった。

軍の人に気を使ってる先生には悪いけど、あたしはうれ
しい。

こうして先生に会えて、あたし心がはしゃいでる。

ぴとって先生の肩に寄りかかって。

「船が来るまで、あたしもここにいていいかな……。？」

どのくらいの時間かわからないけど、先生の隣にいたい。

この肩から伝わってくる温度、もうちよっと感じてた
い……。

先生はちょっとだけためらったみたいだったけど、「う
ん」ってうなずくと。

パジャマのままであちやっただあたしに、自分の着てたブ
ルズンを半分おっそわけてく
れたんだ。

皮のブルゾン、皮の手袋にブーツ。

軍服に身を包んだ先生は、いつもより頼もしく見えた。

訓練の成果だよね。

鍛えた体は、前よりずっと胸板も厚いし腕もガツシリしてる。

カツコイイ……なんて無邪気に思えるわけではないんだけど……。

訓練なんて何をするのか見当もつかないけど、たしかに変化した先生の体を見て、あた

しはなんだか泣きたくなった。

先生の隣で、がんばってる先生を誇りに思いながらも、なんとなく泣きたくなった。

ボーっとした天然の先生に、こんなガツシリした体はミスマッチだね……。

でも……先生、がんばってるんだ……。

軍の兵隊さんとして、がんばってるんだね……。

「寒くない？ これも、してなよ」

先生は自分の手袋を取ると、あたしに渡した。

「あ……ありが……！」

(あ　っ！)

お礼を言いかけてあたし、先生の差し出した手を、凝視しちゃった。

だって！

だってその手の……その指に……。

「あ……」

あたしがあまりにじっと見つめるから、先生も気付いたみたい。

一気に緊張したみたいに、サツともう片方の手でその指を隠すと、

「あはは……小指にしか、は、はまらなかつたんだ……」
照れくさそうに笑って言ったの。

先生が隠した、その小指には、

こんな時代にミスマッチな、シルバーのリング。

ピンキーリングなんてまだないはずなのに、先生っておしやれ？

ってわけじゃなく、それは、

あたしが入隊の日、あげたものだ……。

「先生……してくれたんだけ……」

「う、うん……まあ……。あ、でも、普段は取ってるんだ。

上の人に見つかったらうるさ

いし……。あ！でも、ちゃんといつもポケットに入れてあるから！」

先生が早口で力強く言うから、

あたし、一瞬きよとん、つとして。

でも、そのあと照れくさそうに視線を外した先生がとつてもかわいくて……。とても、うれしかった……。

「ありがとう、先生」

心の中であつたかーい気持ちが増えていく。

好きっていう気持ちが増えていく。

先生の手袋、ちよつと大きかつたけど、先生のぬくもりがまだ残つてとつても温かい。

ニコニコしてるあたしに、先生も照れた顔で笑つた。

「胡桃ちゃんにも、何かあげたいんだけど……。何もなくてごめんな」

「そんなの、何にもいらないよ。何にもほしくないもん」

こつちやつて先生といられば、それだけで大満足なんだから。

あたし、先生の肩に寄りかかりながらフと思つてた。

ムコウの時代じゃ、何かいつも欲しがつてた。

ちよつとだけ付き合つてた人がいたけど、一緒にいられる時間よりも、付き合つてる証

みたいな目に見える物を欲しがつてたな……。

指輪やネックレス、バースデイプレゼント、クリスマスプレゼント……。いろんな物、もらつてた。

好きな人と一緒にいられる時間の貴重さなんか、気付きもしなかつたや……。。

ロウソクの火のやわらかな光の中で、先生がポツンと言つた。

「僕が君にあげられるものは、平和な時代、かな……。」

「え？」

あたしが先生を見上げようとすると、先生は先回りするようにあたしの肩を抱き寄せた。

(！)

どきつて、心臓がぎゅつてした。

そんなあたしの上から、先生の声が静かに降りてくる。

「僕みたいないない兵士に何ができるかわからないけど、でも、

僕が戦場へ行って戦うことで、君の生まれた平和な世界を作れるって思いたいんだ……。それが唯一、僕が君にしてあげられることだって、思いたい」

「……………」
「平和で安全で、豊かで……胡桃ちゃんが元気に笑ってられる時代に……」

横目に、先生の手が映った。

小指にはまったシルバリング。

あたしの時代の……未来の豊かな国の ……。

走馬灯のように駆け巡っていく。

戦争のない、平和で安全で豊かなあたしの時代。

それが当たり前のような顔して生きていた自分のこと。

溢れる食品、溢れる情報、溢れる物品。

それに囲まれてたあたし。

それに甘えてぬくぬくしてたあたし。

新世紀の、

戦争を知らない時代の、あたしたち ……。

「せんせ……」

「きつと、戻るよ……」

先生が言ったその言葉。

もう、何度も聞いた言葉。

でもあたし、心の中で何かが弾けたの。

そうじゃない！ って、あたしが、叫んだの……。

「戻れなくてもいいよッ！」

「え……」

「あたし……未来になんか戻れなくてもいいの……！ 別に平和や豊かさなんか欲しくな

いもん！」

「……胡桃ちゃん……」

あたしは先生と向き合つと、挑むような目で先生に言った。

心のままに、素直な気持ち。

お願い先生。

あたしの気持ち、受け止めて……。

あたしの覚悟

それが一番大事だってわかったから……。

「確かに、あたしの時代は便利だし平和だし、たくさんの物はあるし豊かかもしれない

よ……。でも！ でもね、先生……」

「……………」

「あたし……未来なんかいらぬ。この時代で先生といわれれば、未来なんかいらぬの！」

ムコウの時代の生活、全部引き換えにしてもあたしが一番大切なのは、先生だけなの。そ

れほどあたし、先生が好きなの……だから……戻れなくたっていいの……！」

「胡桃ちゃん……」

「あたしが過去へ来たワケは、先生と出会うためだったんだよ。先生と出会って、先生に

恋するためだったんだよ。あたしは、そう思ってる」

真つ直ぐのあたしの視線。

先生はちゃんと受け止めてくれたように、しばらく黙った後で、一度うなずいたの。

それでね、

あたしの名前を優しく呼ぶと、

あたしの大好きな微笑み浮かべて、童顔に似合わないその低い声で言ったんだ。

ロウソクの炎がゆらゆら、ゆらゆら……。

先生の声にあわせて、しなやかに揺れた……。

「胡桃ちゃん、ありがとう……。でも、僕には君に待って欲しいとは、言えないんだ」

「え……」

「戦争で生き残る保障はどこにもないし、そんな無責任なこと言えない。だからね、せめて受け取って欲しいんだ。僕が戦争に行く意味を……」

「い……み……?」

「うん。前に僕は、国のために戦争へ行くって言ったよね。でも、入隊して訓練をして

思った。僕が戦おつって思つのは、今の国のためじゃない」

「……………」

「僕が守りたいのは、君が生まれる“未来”だって……。未来の日本の幸せのために、今

戦うんだって。だから僕は戦争へ行く。それで一生懸命戦う」

「……せんせ……」
「好きな人が生まれてこなかったら、困るからね。大好きな胡桃ちゃんが、ちゃんと生まれて、十七歳の時、僕と出会ったために過去に来てもらっために、今、僕ができることは戦争へ行って戦う。この国を未来へつなげるために」
「っ！」

(先生　！)
先生！

“大好きな”、
って……言ってくれた……。
体中が震えて、今まで流したことのないような熱い涙が心から溢れ出して頬を伝った。
うれしいのに、うれしい気持ちじゃなくて、
なんだかあたし、混乱してた。
欲しかった、先生の気持ち。
目の前に差し出してくれてるのに、あたし、それを受け取れないでいる。
受け取ってしまったら、
その瞬間、
先生は　……。

先生はあたしの頬を包み込むと。
あたしの涙を受け止めながら。
「大丈夫だよ、胡桃ちゃん。約束したよね。未来で会おうって……。僕は胡桃ちゃんのこと、絶対に忘れない。だから絶対に探し出すよ。絶対にまた、出会えるから」
「先生……」
「この時代で待ち合わせはできないけど、きっと未来で会えるから」
「……っ！」
「　大丈夫、胡桃ちゃん」

自信満々に目の前で笑う。
どこからその自信は来るの？　って思いつつ、
あたし、その笑顔を信じる気持ちになれた。

先生の『大丈夫』を、心の真ん中に、受け止められたんだ。

だからあたし、
涙をふいて微笑んだの。

先生の心に残るような、とびきりの笑顔、ちゃんとできたかな？

でもこれがあたしの精一杯ってくらいの笑顔で、

「うん！」

って、元気にうなずいて、

先生の胸にとびこんだんだ。

先生の想い。

あたしたしかに受け取ったよ……。

ほんとの、ほんとのの気持ち、今ここでずっと一緒にいたいけど、でも、それはどう

しても叶わない願いだから……。

先生の精一杯の気持ち、わかったから……。

だからあたし、先生のその気持ち、

ちゃんと受け取るよ。

「ありがとう」

の感謝をいっぱい込めて。

「大好き」

の愛をいっぱい込めて。

今は、涙を止めて、

この“時”を分かち合える最高の笑顔で。

先生の温度を感じていたいから……。

重なり合った心は、決して変わらない。

どんなに時代を重ねても、

どんなに周りが変化しても、

あたしの気持ちは、変わらない。

だから先生。

未来でもう一度会おうね。

かならず会おうね。

二人だけの約束。

必ず、
いつか必ず叶うって、あたしは信じてる。
先生も、信じてくれる。

信じあう気持ちは、いつかまた、奇跡を起こすよね……。
あたしたち、幾千の奇跡が重なり合って初めて出会うこ
とができたんだもん。

きっとまた、神様はあたしたちに奇跡を与えてくれるは
ず。

時を越えて、

未来の“時”に、

もう一度出会える奇跡を

信じよう……。

だからほら、今はこんなに穏やかな気持ちでいられる。
先生を抱きしめながらあたし、未来まで抱きしめてる気
分。

これが最後じゃないんだって、自然と信じられるよ。

ねえ、先生もそうでしょ……？

心が触れ合ってるこの瞬間を、

一緒に未来へ運ぼう……。

一緒に未来へつなごう……。

朝が必ずやって来るように、未来も必ずやってくる。

豊かで安全で平和で、

そして、大好きなあなたがいる未来。

あなたが作ってくれる、あたしたちの未来。

あたしは待ってる。

もう泣かないで、あたしは待ってるから……。

だから先生……。

「もう、行かなくちゃ……。」

ロウソクの炎が消えかける時間がやって来た。

朝日が昇るより前に、先生はつぶやくように言った。

小屋の外は、まだ薄暗くて、もやがかかっている、波の
音だけが響いてた。

つないだ手を離す時間だ……。

やっぱり泣きそう……。
でもこらえなきゃ。

最後じゃないんだから……ちゃんと笑って先生を行かせてあげなきゃ。

「ここでもいいよ」

「うん」

笑え笑えって言い聞かせてるのに、ほっぺたが引きつるのは、凜とした空気のせいかな？
それとも……。

「胡桃」

(……)

ザザン……

ザザン……

繰り返す波の音の中で、先生の声が響いた。

ちゃんと呼び捨てされたのは、初めてだ……。

先生も、笑っているのに、なんとなく震えてた。

あたしたち、まだ手が離せない。

「胡桃。また、紅葉見に行こうな」

「……先生……」

「約束な」

あの時みたいに、先生は小指を差し出す。

あたしのあげたリングのついた小指。

あたしが自分の小指を絡めると。

ぎゅって、指きりげんまん。

それでね、ニコって笑ったんだ。

あたしが一発で恋した、あの時と同じ笑顔だった。

「……約束ね」

「ああ」

「ねえ先生」

「ん？」

「あたし、戦争のことちゃんと勉強するね。ちゃんと過去のこと勉強してもう繰り返し返さないようにするから……」

「……うん」

やっぱり涙腺が解けちゃったあたし、
笑顔なのに泣いてた。

先生もちよつとだけ、泣いてた気がする。
でもしっかり確認できなかったのは、先生があたしの頬
を包んで、

そして、

あたしに

キスしてくれたから

一瞬の、短いキス。

目を合わせた先生は、センチメンタルどころか、
超照れちゃって、なんだか笑っちゃった。
でも、照れたついでに先生言ったんだ。

「今度は僕が奇跡を起こすから
……って。」

それが、先生の最後の言葉だった。

あたしに残してくれた、この時代の最後の言葉。

あたしの手の中に、

そつと差し出すように。

そして未来へつなげるように。

あたしにくれた、最後の声

……。

あたしはしばらくそこから動かなかった。

先生が歩いて行った白い砂浜を、ずっと見てたの……。

つないだ手は離されて、

そして、

何事もなかったかのように、

朝日が昇った

。

「あ、お母さん。おはよう。ちょっと待ってね、今ご飯作るから」

「……胡桃ちゃん」

お母さんが寝たまま首をこちらへ動かして、微笑んであたしを呼んだ。

「胡桃ちゃん……ありがとうね……」

「え？」

「いろいろ、ありがとうね……」

「お母さん？」

なんだかいつもより弱々しく感じるお母さんの声。

あたし、嫌な予感が走って、居間へ上がるとお母さんの横に座ったの。

「お母さん、どうかした？ 具合、悪い？」

「そんなことないよ……。今日はいつもより、いい調子よ」

お母さんはあたしを見つめて、声は弱いけど、晴れ晴れしたような笑顔をした。

「私ね、夢を見たのよ……」

「夢？」

「ええ……胡桃ちゃんと、誠の夢よ。二人の未来の夢よ……」

「お母さん……」

「……胡桃ちゃん……。誠を頼むわね……。きつとあなたたちはまた会えるから……。だから」

「……今度は必ず……」

「お母さん、もう、しゃべらないで。あたし、今クスリ取って来るから」

そう言って、土間に下りようとしたあたしの手を、お母さんは引きとめるように握ると。

お母さんの目、潤んでる……。

弱い力であたしの手を握るから、あたしは慌てて、両手でお母さんの手を握った。

さっきの嫌な予感は、まだ続いていた。

「胡桃ちゃん……日本は、この戦争に勝つのかしら……」

初めてだった。

お母さんに未来のことを聞かれたのは。

何て答えたらいいんだろう……。

本当のことなんか言えない。言いたくない！

でも、お母さんの目……。

あたしを見るお母さんの目……。

お母さんの目に、あたしの嫌な予感は重なった気がした。

あたしはしつかりお母さんの手を握って、泣きそうに震えるほっぺを引きつらして、精一杯笑ったんだ。

お母さんの目にはつきり映る自分を見つめながら。

「……日本は……とっても豊かな国になるよ……」

「……………」

「安全で戦争がなくて平和で……とっても豊かな国になるよ……」

「……そう。見てみたかったわ。豊かな、未来……」

「見えるよ！ 見えるよッ！ お母さんッ！」

あたしは必死に叫んだけど、

お母さんは天井を見上げると、一つ深く息を吸い込んだ。

お母さんの目からは涙が一筋流れ落ちて。

それで……

「胡桃ちゃん……ありがとう……。幸せになるのよ……誠と、幸せに……」

「お母さんッ！！」

引き止めるようなあたしの声に、

お母さんはもう一度微笑んで。

そして息をつく。

もう二度と再び、その体に息を吸い込むことは、
なかったんだ。

「お母さんッ！」

イヤッ！ こんなイヤだ！

どうして？ どうしてこんなに突然なのよ？

どうしてこんなあつという間なの？

こんなの、イヤ
！

お母さんの力ない手を、あたしはずっと握り締めてた。
引き戻すように、何度も叫ぶように繰り返し呼んだ。

未来から来た風変わりなあたしを、快く引き取ってくれたお母さん。

あたしのためにモンペやシャツを用意してくれたお母さん。

いつも優しく笑ってくれた。
あたしの失敗ご飯もおいしって食べてくれた。
いつもあたしのこと、心配してくれた。
いつも、

いつも……。この時代で戸惑うあたしを、
せつない恋で揺らぐあたしを、
いつも見守っててくれた

「お母さんッ！」

あまりにも、早い。

あまりにも突然な、

永久な

…… お別れ。

信じられないよ……。

こんなにアツサリ、死んじやうなんて……。

イヤだよ……。

イヤだよ、お母さん……。

「行かないでえ……」

泣きながら、

あたしはお母さんを抱きしめるように顔を伏せて。
ずっとずっとつぶやいてた。

大好きなお母さんがいなくなって悲しくて。

でも、

お母さんにとって大好きな先生が、自分の息子がここに
いないなんて、

そのことがもっと、もっと悲しかった。

戦争なんて……。

戦争なんて、ダメだよ……。

人はいつか必ず死んでしまうのに……、

こんなにアツサリ死んでしまうのに……。

だったら、もっとその命を大事にしようよ……。

国なんて関係ない。

みんな同じくらい大事な命じゃん。

誰にだって死んで欲しくない人はいるもの……。

誰にだって死んだら悲しむ人がいるもの……。

他人が奪っていいはずないよ……。

国の事情で奪っていいはずないよ……。

戦争なんて、ダメだよ……。

こんなに儂い命なら、もっと大事にしようよ……。
もっと……。

他人をいとおしもうよ

……！

「せん……せえ……」

お母さん、微笑んでたよ……。

あたしたちの未来を祈って、微笑んでたよ……。

涙、
止まらないよ……

。

15

ウウウウウウ

泣きすぎて耳鳴りがしたのかと思った。

でも、この音、前にも聞いた……。

空襲警報、だ。

あたし、それを知った時、妙に冷静に受け止めてた。
いつの間にか、一日が終わっていた。

青空も夕焼けも、もう消え去って星座の輝く夜がやって
来てた。

部屋の中は真っ暗だったけど、

あたし迷いもしないで押入れを開けると、そこにしまっ
たままになっていた制服を手に
取る。

なんだか、なつかしい……。

そう思う自分が、ちょっとおかしくて笑っちゃった。

お母さんのくれたシャツとモンペを脱ぐと、丁寧にたた
んで制服のあった場所に置いた。

そして、着慣れた制服に、袖を通した。

白いシャツは冷たくて、タータンチェックのスカートの
短さに一瞬驚いた。

こんなにスカート、短かったっけ？

(そりゃ、先生が照れるのも当たり前か……)

なんて、この時代へ来たばかりのことを思い出してた。

外からはこの前よりも近く、爆音が聞こえる。

島に直接爆弾を落とすのか？

細かく揺れてるし、あきらかにこの前の空襲よりも激しいな……。

(もしかしたら……)

ルーズソックスをはきながら、あたしはフと思った。

もしかしたら、昨日先生がこの島にいたのは、薬草なんかのためじゃないかもって、そんなことを思ったの。

もしかしたら今夜の空襲、先生は知っていたのかもしれない。

戦いの作戦のためにこの島にいたのかもしれない。

島の海域が戦場なのかもしれない。

今、この爆音の中で戦っているのは先生かもしれない。

そんなのあたしの思いつきだけど、そう考えたら、怖い気持ちなんか少しもなくなっちゃった。

大丈夫だ！ って、逆に明るくなっちゃったよ。

あいかわらず、あたしって単純。

でも……。

先生が戦ってるなら、本当に大丈夫だね……。

新世紀の制服に身を包んだあたしは、お母さんの横に座りなおすと。

暗闇の中、大きく一つ深呼吸。

さあ、帰ろう……。

未来の日本へ。

あたしの時代へ。

先生に導かれて、

お母さんに見送られて、

さあ、帰ろう

。

頭の上の爆音はもっともつと激しくなる。

島みんなは大丈夫かしら……。

先生、この島を守ってね……。

みんなを守ってね……。

ポオオオオン!!!!!!

すさまじい爆音があたしの鼓膜を揺らすと同時。

あたしの目に、

一瞬とてもきれいな月が見えた。

先生と眺めた、

春代さんと眺めた、

美しい白銀の、月。

真上からその光が降り注いでくる。

あたしはまるでスポットライトに包まれたようだった。

そして、お母さんの安らかな顔も、一緒に照らしてくれた。

お母さんは月光に包まれて、

天へ昇る。

そして……。

月光の向こうから飛行機が落ちてくるのがスローモーションのように見えて。

「!」

ポオオオオオオオ……ン!

燃え上がった炎は、もう、

あたしの目には映らなかったの。

爆音も、

爆風も、

鳴り止まなかった空襲警報のサイレンの音も、

もう。

遠くなっていた

。

……………

そよそよした風……。
でも、

波の音はない。
潮のにおいもしない……。

うつすらと目を開けた時、
意識の中に飛び込んだのは甘い果実の匂いだった。

(「」……ど「」……?)

「胡桃？」

「胡桃！」

あたしを呼ぶ、声……。

ああ、なつかしい、声。

それは、

あたしを生んだ、

お父さんと、お母さんの

声。

16

「胡桃、一体何があつたのよ？」

「よくここがわかつたな」

さっきから、お父さんとお母さんが代わる代わるにいる
んなことを聞く。

いつもならウザつたいつて思うその声が、とつてもいと
おしくて、なつかしかった。

戦争時代へ行ってた、なあんて言ったら、どんな顔、す
るかな……。

あたし、戻ってきたんだ……。

現代の、日本へ、帰ってきた。

ここは、長瀬家の本家。

どうしてかはわからないけど、あたしは自分の家じゃな
くて、横浜市内から外れたところ

にある、おじさんの家の前に倒れていたの。

時間はあの日……。

タイムスリップしたあの日、だった。
ほら。

あの朝、お父さんとお母さん、そろっておばあちゃんのお墓参りに行くところだったじやない？（たしか命日？）

だから、この本家に、お父さんたちもいたんだ。

あたしは、お父さんたちの質問攻撃を何とかかわして、おじさんの家の居間でお茶をい

ただいてるとこ。

大きな漆塗りの机の上には、おまんじゅうやらおせんべい、チョコもあった。

あたし、久々のチョコレートの味を体中で感じてた。

（おいしー！ わーん、なつかしいよお！）

「やだ胡桃。そんなにチョコ好きだった？」

さっきから連続してチョコを頬張るあたしに、お母さんが呆れたように言った。

そんなあたしにおじさんが笑いながら、もう一杯お茶を入れてくれた。

「胡桃ちゃん本当に久しぶりだね」

「あ、はい。あ、ありがとうございます」

（おじさんに会うのも久々だけど、お父さんたちに会うのも久々だわ）

なーんて、お茶をすすりながらのんきに思ってるぞ。

「あれ？ その時計」

フと、おじさんの目があたしの腕に止まった。

「ん？」

なんだろうって思っ、自分の左腕を見ると。

「ああ ツ！」

あたし、思わず叫んじやったよ！

だって！

だって、壊れたはずのあの時計が……。

「どうした？ 胡桃？」

「お父さん！ 時計が……！」

（時計が直ってるの！）

そう、たしかにアッチの時代についた日。

あたしの腕時計はガラスにヒビ入ってたし、針も動かなくなってた。

お気に入りのアンティーク時計が壊れちゃって、あたしシヨックだったもん。

それなのに……。

いつの間に腕についてるし……直ってるし……！

どういうこと？

「なつかしいなあ、その時計！」

声高らかに、おじさんが言った。

お父さんも。

「そうだろ？ おふくろにもらった時計なのに、胡桃に取られちゃったんだよ」

「そうなんだ。でもおふくろ、息子のうちの誰かに女の子が生まれたら、この時計をあげ

るようにって言ってたから、ちょうどいいんじゃないか？

俺ンとこは女の子いないし」

「そういえば、そんなこと言ってたっけ」

「ああ。なんかやたらこだわってたよ。女の子が生まれることわかってたみたいないカンジ

だったなあ……。そういえば、胡桃ちゃん。それ、制服だよね？」

「え……、あ、はい」

「それ……たしか……」

おじさんは何か思い出したように、突然席を立つと、居間を出て行った。

時計……どういうこと？

なんだか頭が混乱しちゃう。

「ねえ、お父さん。これ、おばあちゃんからもらったの？」

「ああ。おばあちゃんのお気に入りの時計だったんだよ」

なんだろう、このカンジ……。

なんだか、からまっていた糸が一本一本ほどけていくような、カンジがした。

あたしは立ち上がると、ふすまの向こうにある、仏壇の置かれた部屋へ入った。

おじさんに家は本当に久々で、仏壇のこの部屋になんかほとんど入ったことなかったの

に、どうしてかあたし、この部屋に来ればわかる気がした

の。

「ほどけそうな系は、この部屋ですべてとけるって……。説明がつかないんだけど、どうしてか足が勝手にこの部屋に向かったんだ。」

大きな仏壇には、遺影が飾られていた。

見たこともないおじいちゃんと、もう一つのほうには、同じく見たことのないはずの、おばあちゃん……。

(……………)

見たこと、ないはずだったのに……。

実際、会ったことなんか無いのに、すぐにわかった……。歳をとってもなお、その品だけは消えることはなかった。

「胡桃ちゃん！ あったあった。これ見てよ！」

おじさんが弾んだ声で、仏壇の前で立ちすくんでるあたしの目の前に、一枚の画用紙を差し出した。

「……………」

「これ見てよ、ほら、胡桃ちゃんそっくり！」

おじさんが不思議そうにしてよりも、楽しそうに声を弾ませる。

久しぶりにお母さんのことを思い出せて、楽しいみたい……。に……。

お父さんもお母さんも来て、その画用紙を覗き込んだ。

「まあ！」

「あ！ これだ！ これこれ！ だからだー、胡桃の制服、どこかで見たことあるって思

ったんだよな」

長い間の謎が解けて、お父さんも声を上げた。

その画用紙……古ぼけて茶色く焼けた画用紙には。

男の人と女の子の姿が描かれていた。

「この絵、母さんが描いたんだよ。そうそう、昔話してたっけ。母さんのもっとも大事な

人たちだって言ってたな」

「あー……、そういえば……おふくろ、この絵の話、よく聞かせてくれたっけ……」

おじさんもお父さんも、なつかしそうに目を細めた。

昔々の、不思議なお話……。
お母さん若かった頃の、お父さんと出会う前の、
淡い恋のお話……。生まれ島で出会った、大切な人たちのお話……。

二人の息子に聞かせた、
不思議な、恋の話。

お父さんとおじさんがなつかしそくに話すそれを聞いて、
あたしは、「画用紙に描かれた、“自分”を見て、
「胡桃……？」
って、お母さんが声をかけたのも気付かずに、
ぼろぼろ泣き出していた。

制服を着たあたしと、
そんなあたしの髪を優しく撫でる、先生の姿。
そこに描かれた絵は、
あたしの“時を越えた恋”
そのものだった。

あたし、それからお墓へ行ったんだ。

墓石にはたしかに、
“春代”
って名前が彫られていた……。

墓石の前。
手を合わせた後であたしは一人、つぶやくように話し掛
けたの。
五十年ぶりの、再会、だね……。

「春代さんがあたしの、おばあちゃんだったなんて……」
すごいフエイント。
すごい神様のイタズラ。
びっくりしすぎて笑っちゃう。
自分の腕にされた腕時計を見ると、春代さんの笑顔が浮
かんでくるようだった。
「春代さんがあたしを導いてくれたんだね……」

横浜に行った春代さんは島に戻らず、結婚したんだって。

長瀬純一という、あたしのおじいちゃん。

あたし、お父さんに聞いてもらった。

「おばあちゃんは幸せだった？」
……って。

先生に恋してた時の春代さんしか知らないから、その人と出会ってちゃんと恋をして結婚したのか、すごく気になったの。

春代さんが少しでも無理をしていたり、先生を忘れてなかったらって思うと、罪悪感っ

ていうか……とにかく春代さんが幸せじゃなきゃヤダ！ って思ったんだもん。

お父さんはあたしの質問に不思議そうだったけど、あたしのすぎるような瞳から何かを感じ取ってくれたのか。

優しい声で、微笑んで言ったんだ。

「おじいちゃんとても仲良くしていたから、おばあちゃんは幸せだったと思うな」
……って。

ねえ、春代さん……ううん、おばあちゃん。

この時計、あたし大事にするね。

おばあちゃんの想いがたくさんこもってるんだよね。

“長瀬”っていう人と結婚を決めた時、きつとおばあちゃんはこの事実気付いたんだよね。
ね。

だから、あたしのこと、呼んでくれたんでしょ？

先生と出会うために、

あたしのこと、あの時代へ導いてくれたんでしょ？

この時計の針を、

五十年以上も戻してくれたんだよね……。

「……ありがとう」

最高の、恋をしたよ。

あたし、最高の時間をもらったよ。

ありがとう、おばあちゃん……。

それからあたしの大好きな春代さんを愛してくれて、
ありがとう、おじいちゃん。

「胡桃、そろそろ帰ろうか」

向こうから、お父さんの声。

おなごりおしかつたけど、あたしはもう一度手を合わせ
て。

「また来るからね」
って約束をして、きびすを返した。

丘の上にあるお墓は、夕焼けに照らされて、オレンジ色
の光がキラキラ踊っていた。

『またね、胡桃ちゃん……』
そんな春代さんの柔らかな声が、
遠くから聞こえた気がした。

あたしの背中を微笑みながら見送る春代さんと。
ちよっぴり先生に似たカンジの、優しい目をしたおじい
ちゃん。
肩を寄せ合ってあたしに手を振っていてくれた

あたしのタイムスリップは、
そうして、
終わりを告げたの……。

エピローグ

（あちゃ〜！ 遅刻だよ！）
ロッカーを荒々しく閉めると、あたしは更衣室を飛び出
した。

制服を白衣に変えて。

長瀬胡桃、二十二歳。
ただいま新米ナースです。

あの、タイムスリップから五年。
高校を卒業したあたしは、看護学校へ通って、ナースの
道へ進んだんだ。
春代おばあちゃんの後をついで、ね。

あの戦争 太平洋戦争。

二百万人の人が亡くなった第二次世界大戦中の太平洋海

域の大戦。

アメリカやイギリス、中国と戦ったんだって。

あたしあれから結構勉強したんだよ。

おかげで日本史だけは得意になったんだ（えっへん）

戦争はね……あたし、ダメだ！ って思ってた。

バカらしいって先生に言い放った時もあったよね。

でもね、勉強してて思ったの。

この戦争はたくさん悲劇を生んだ（原爆もそうだしね）

でも、戦争があって、その中で戦った人たちがいたから、

現代の日本があるんだって思うの。

皮肉なことだけど、こんな経済大国になったのは、過去に戦争があったことが大きく関わってるもの。

先生の言ってくれた通り。

先生や、たくさん、本当にたくさん兵隊さんのおかげで、今、あたしはこんなに豊かな国で生きることができる。

だからね、あたし、戦争を肯定はもちろんしないけど、まっこうから否定するのもしやめたんだ。

現代のあたしたちが、過去の戦争なんてバカバカしい！なんてばかり言ったら、こ

の国を命がけで守ってくれたたくさん命に申し訳ないって感じたの……。

過去の悲劇を絶対に繰り返さないって誓いつつ、今のあたしたちを守ってくれてたくさん尊い命に感謝しようって思うんだ。どうかな？

毎日感謝って気持ちじゃなかなかいられないけど、せめて、終戦の日、八月十五日くら

いは、日本中の兵士と、戦争で失われた命に、感謝と誓いをこめて手を合わせるようになった。

もちろん、おばあちゃんのお墓参りにも、しょっちゅう行ってるんだよ。

どう？

歴史なんか関係ないやいって思ってた頃の胡桃とは、ちよっとは変わったでしょ？

歴史の勉強をしててわかったことがあったの。

それは、須江島の正体。

地図で点にしかなかったくらいに満たないくらいの島は、一夜の空襲と、

その年の終わりに起きた大津波

でこの日本から消え去ってしまった。

信じられない話だけど、本当のこと。

今、須江島は太平洋の底に沈んでるの。

あたしの過ごしたあの町並みが海の底だなんて信じられない。

きっと、あたしを泥棒あつかいしたおばちゃんも、悪ガキの正太も、

そして、お母さんも……。

横浜の海からあたしは須江島の方角に向けて花を流した。そんなことくらいしかできないけど、でもみんな、安らかに眠ってほしい……。

そして…… 先生、のこと。

あれから五年。

あたしはまだ待ってるの。

先生が起こしてくれる奇跡を、ずっと待ってるんだ……。

先生のいた航空部隊は、“特攻部隊”とも呼ばれた。

あたし、それを歴史書で読んだ時、心臓が潰れるかと思っ
たよ。

だって、人間が戦闘機に乗って、それごと敵の船に突っ
込むんだよ。

そんな作戦誰が考えたのよ！ って怒りと涙で気が変に
なりそうだった。

きっと、先生も。

同じように戦闘機に乗って敵船に突っ込んだのかな……。

そうして……。

考えたくない現実だけど、

でもきっと先生は……。

だけど、あたしは信じてるよ。

先生が言ってくれたこと、全部信じてるよ。

だから五年たった今も、気持ちの全部、先生のもの。
あたし、あの夜の気持ちのままいる。

変わらず先生のが好き。

友達はみんな、あたしに男の子を紹介してくれるけど、
あたしの心、全然動かないの。

どんな男の子に出会っても、先生以上の人なんか、どこ
にもいない。

我ながら、一途でしょ？（え？ 誰よ、頑固って言うの
は！）

信じること。

信じつづけることが、あたしの愛。

先生を、好きっていう、愛の証だから……。

今もこの腕にある、おばあちゃんからもらった腕時計。

きつとこの時計がまた時間の奇跡を起こしてくれるはず。
亡くなったお母さんもあたしたちの幸せを祈っていてく
れた。

きつとね……。

きつと信じていれば、

先生と、みんなが奇跡を起こしてくれるはず。

あたしたちを再びこの世界で、

出会わせてくれるはず

。

「長瀬さんッ！ また遅刻ですか！」

ひえ〜。

ナースステーションから婦長さんがヒステリックに叫ん
でるよう〜！

また、怒られちゃう！

あたしはナースステーションだけを見つめて走ってたか
ら、目の前をちゃんと見てなか

つたらしく、（「わざと、灯台下暗しってヤツだわ」

ドーン！

って、角から出て来た人と、衝突しちゃった！

「キャー！」

ワンピースの白衣にも関わらず、あたししりもちついちゃっ

た。

「ご、ごめん！ 大丈夫？」

(……え?)

このシチュエーション……。

前にもどこかであった。

『だ、大丈夫かい？』

……って、慌てた声であたしに手を差し伸べてくれて。

見上げたあたし、

一瞬、

息が止まった

。

病棟はたちまち、

あの昭和の時代へ

タイムスリップ。

『君、大丈夫？』

って、あの日、

手を差し伸べてくれた、顔。

朝日を浴びたその人の顔。

イマドキめずらしいセンター分けの黒い髪に、

くりくり二重の黒目勝ちな瞳。

童顔なのに、

「大丈夫？」って声は男らしく低くて、ミスマッチ。

時が巻き戻る

。

走馬灯のように、昭和の、あの時代の、あの時に。

あたしと先生が、

過ごした、同じ時代の、

同じ時間に

。

「あの……君、大丈夫？」

でも、

目の前のこの人の声で、あたしは現代に戻る。

同じように童顔とミスマッチの低い声。

同じ、声だ……。

朝日の金色が揺れる、そのほつぺたも、その髪も、

その、瞳も眉も口も……。

「あ……」

それから、左手の小指のシルバーリング……。

時を越えて、

奇跡が……、

起きた。

じつと凝視するあたしを、彼もフイに何かを思い出したような目で見つめた。

……思い出して、

思い出して、あたしのこと……。

「あッ！ 長瀬さん！ 遅いわよッ！」

向こうのナースステーションから、婦長がキンキン声を響かせて叫ぶ。

「……長瀬………？」

彼は眉間にシワを寄せて、考え込む。

もっと見つめ合っていたいけど、そうもいかないみたい……。

あたしは床に散らばった紙を集めるとファイルにとじて、彼が差し伸べてくれた手につかまって立ち上がったの。

やっぱり同じ温度。

……先生の、あったかい、温度だ。

「堀内先生！ ミーティング始めますよー！」
医員室の方からも呼びがかかる。

「あ、行きます！ あ……あの……君……」

「あたし、長瀬です。長瀬、胡桃です！」

「あ、僕、今日付けでこの病棟に勤務の、堀内誠、です」

「はい！」

あたし、元気よくうなずいた。

そうしたら堀内先生も、

ニコって……あの笑顔を見せてくれた。

「あの……後で話があるんだけど……」
「あたしも……、先生に話したいことが……たくさんあります！」

時を越えて、
五十年振りに……、ね。

先生とあたし、
窓から差し込む朝日の中で微笑みあつたんだ。

先生が起こした、
約束の奇跡。

ひさしぶりだね、あたしの大好きなひと。
また会えたね、あたしの大好きなひと。
時を越えて、
約束を果たそう……。
未来のこの時代で、
あなたのくれた、この時代で、
もう一度、恋をしよう。

信じつづけた、あたしの想い。
この時代につないだ、あなたの想い。
たくさんたくさん、
伝えあおう。

あの夜離した手を、
もう一度つないで。
そして……、

もう二度と離さないようにして……。

時を越えて、
今度は笑って言おう。
「一緒に未来を生きよう」
……って。
「一緒に幸せになろう」
……って。

それから、
「大好き！」
……つて、
その言葉を、たくさん
。
奇跡を起こしてくれた、
あたしの、

大好きなひとへ……。

『さよなら、大好きなひと』小坂尚子 著

sakka.org